

海の民サマ人の生活と空間認識

——サンゴ礁空間 *t'bbā* の位置づけを中心にして——

長 津 一 史*

Coral Reef Fisherfolks and Their Space Cognition : Notions of “Land,” “Sea,” and Coral Reef Space among Sama in Sitangkai, Sulu Archipelago

Kazufumi NAGATSU*

This paper aims at exploring the perception of “space” in a marine environment among the Sama people of Sitangkai, Sulu archipelago, the Philippines. Sitangkai is a tiny island situated at the south-western tip of the Sulu chain and surrounded by a massive complex of coral reefs. In the past the Sama boat-dwellers moved around from one coral reef to another, fishing in a limited zone, usually stretching from Sitangkai to Semporna, Sabah ; hence, they have often been referred to as “sea nomads” or “sea gypsies” in the literature. Since the 1950s, however, the Sama of Sitangkai have abandoned their boat-dwelling lifestyle and become sedentary strand-dwellers, although their fishing activities are still predominantly associated with the coral reef ecosystem, within which they fish, culture seaweed, and often spend from several days up to a few months in small fishing boats, together with spouses, siblings and/or parents. Procurement method, gear, and crew organization of their fishing activities are closely associated with topographical features of the coral reef. The Sama’s specialized fishing activities are epitomized by their exploitation of the coral reef. Considering the close and complex relationship between the coral reef and the Sama fishers’ way of life, I focus on the coral reef, called *t'bbā* in Sama, as a key to understanding their notions of living space.

I examine two notions regarding the Sama’s understanding of ecological space. The first point deals with the Sama’s classification of marine/terrestrial space. They classify space in three inclusive ecological categories : land, deep sea, and coral reef, which are termed *deyaq*, *s'llang*, and *t'bbā*, respectively. The latter, *t'bbā*, is classified in much greater detail in terms of topographical characteristics of both the reef surface and the seabed. Secondly, I discuss the Sama fishers’ notions of “land,” and “sea.” The Sama’s basic notion of ecological-directional orientation is designated by the terms *kaleyaq*, or “landward,” and *kawt*, or “seaward.” Their expressions of direction and/or orientation using these terms reveal that “sea” and “land” are defined not in absolute terms but rather in relation to the context. When the ecological context is concerned with an actual land and a shallow beach beside the land, the latter is referred to as “sea.” When a shallow beach and a coral reef are the focus of concern the shallow beach area is referred to as “land.” When a coral reef and a deep sea are the focus, the former is referred to as “land.”

In the Sama’s ecological perception, coral reef is liminal, or ambiguous, space. This space is at the same time both “land” and “sea.” Being liminal, however, does not mean it is unusual. For the Sama boat-dwellers, their daily lifeways and fishing activities were not separated but conducted in one single space : i.e. coral reef space. And, as an inevitable consequence, those who work together

* 京都大学大学院人間・環境学研究科 ; Faculty of Human and Environmental Studies, Kyoto University, 46 Shimoadachi-cho, Yoshida, Sakyo-ku, Kyoto 606-01, Japan

in that space also live together. In Sitangkai, this continuity of space and cultural-ecological adaptation is still partly present. In the Sama's understanding of "space," *t'bba*, or coral reef, remains central.

I はじめに

本論文の目的は、フィリピン南部スルー諸島南西端シタンカイ Sitangkai 島周辺に居住し、專業的に漁撈活動をおこなうサマ Sama 人を対象に、かれらの生活および生産空間としての「海」に対する認識のあり方を、漁撈活動様式との関連に留意しつつ探ることである。シタンカイのサマ人は、かつては舟上に居住空間を構え、比較的限られた範囲の海域を移動しながら一生を過ごす舟上生活民 (boat-dwellers) であり、文献では漂海民 (sea nomads, sea gypsies など) として知られていた。舟上生活の際の生活空間はサンゴ礁上であった。数週間から数カ月におよぶ漁をおこなうサマ人は、現在も多くの時間をサンゴ礁上で過ごす。現在多くの人々が従事する海藻養殖のための杭上集落も、陸地のある島から数 km も離れたサンゴ礁上にある。主要な生業である漁撈活動は、魚介類の採捕・採集、海藻の養殖のいずれにしても、ほとんどがサンゴ礁の海でおこなわれる。こうしたことから、本論では *t'bba* と呼ばれるサンゴ礁空間を、サマ人がどのように認識しているのかという点に特に着目したい。¹⁾ なお、サンゴ礁 (coral reef) とは、造礁サンゴその他の造礁生物によって形成された地形を指し、生物としてのサンゴ個体や造礁サンゴの群体 (colony) とは区別される [中井 1990]。本論ではその地形 (海底) と海水・海面・海面上部分をあわせてサンゴ礁あるいはサンゴ礁空間と呼ぶ。²⁾

舟居住生活という陸の生活からみると特異な生活形態ゆえに、少なからぬ研究者がサマ (バジャウ) 社会を研究対象としてとりあげてきた。しかしながら、これまでの研究は、サマ人が専門的な漁民であり、海洋環境に深く関わっていることを強調しながらも、かれらの漁撈活動そのものやその背後にある環境認識には十分に注意を払ってこなかった。唯一 Sather [1985] が、漁法とその背景について概略的に論じているだけである (これまでのサマ、あるいはバジャウ社会の研究については Lopian and Nagatsu [1996] を参照)。

秋道 [1995: 2] は、これまでの漁民社会を対象とした研究の問題点は、「陸上 (民を対象とす

- 1) 本論は、シタンカイにおける調査で得たデータをもとに構成されている。データを収集した調査の期間は、1994年の5月から7月までと9月の2週間の計約3カ月半である。現地では、サマ人のハジ・ムサ・マラボン Haji Musa Malabong 氏 (49歳<以下年齢はすべて自称に従う>、男性、小学校教師) の協力のもとに調査をおこなった。本論のデータは基本的に、現在でも実際に漁撈活動に従事しているサマ人から得ている。聞き取りは、おもにサマ語でおこなった。ハジ・ムサ氏が同行した際には氏から英語での説明を受けることもあった。なお、本論では、ハジ・ムサ氏以外の調査協力者については、実名を記さず名前アルファベットの頭文字のみを記すことにする。
- 2) 単に「サンゴ」というときには、六放サンゴ垂網の造礁サンゴを指している。そして、便宜的に巨大な塊状群体を構成しているサンゴを「サンゴ石」、枝状サンゴの群体や、複数種のサンゴがまとまってあるものを「サンゴ群」と呼ぶことにする [大島 1992]。

る研究)における既成の問題領域にのみ学問的な関心を集中し、海をふくむ自然との総合的なかかわりを追求する視点」を欠いていたことにあると指摘している。この指摘は、サマ社会の研究についてもあてはまる。本稿は、こうした指摘をふまえ、サマ人と海とのかかわりの一端を明らかにすることを意図している。

II サマ人と調査地の概要

II-1 サマ人

II-1-1 呼称の定義

スルー諸島の民族集団はかつてのスルー王国 (Sultanate) のなかで伝統的支配層を占めてきたタウスグ Tausug 人と、サマ人に大きく分けられる。両者は言語的に相違する [Nimmo 1968: 34]。いま述べたサマ人とは言語学的なサマ語系民族集団に含まれる人々のことで、多数の方言集団に分けることができる。サマ語系民族集団はスルー王国の発展 (18~19世紀) の過程で、支配者層に対してより従属的ないわゆるバジャウ Bajau 人と、海賊などの役割を担う自由度の高いサマル Samal 人に分化していったと考えられている [J. Warren 1981]。

本論が対象とするのは、シタンカイを本拠地とするサマ人のうち、過去に舟上生活を営んでいた人々である。上の区分ではバジャウ人にあたる。かれらは、サマ・ディラウト Sama Dilaut³⁾ (「海のサマ」) あるいは「シタンカイのサマ」 Sama Sitangkai と自分たちを呼ぶこともあるが、通常は単にサマ Sama と自称する。このサマ・ディラウト人はシブツ Sibutu 島などから移住してきた陸上居住の傾向の強いサマ人を、「陸の人」 aa Deyaq あるいは「陸のサマ」 Sama Deyaq と呼び、自分たちと明確に区別している。従来の文献は、上でみた区分のサマルをこの「陸の人」に対する呼称として使ってきた。本論ではサマ・デヤ Sama Deyaq という呼称を用いる。そして、単に「サマ人」と呼ぶときには、シタンカイを本拠地とするサマ・ディラウト人を指すことにする。⁴⁾ 同様に、かれらの言語を「サマ語」と記す。⁵⁾

3) ハジ・ムサ氏は、日本人など外部からきた人に自分たちのことを説明する際に、時々この呼称を用いていた。彼はこの呼称を一種のエスニック・アイデンティティとして用いたいと言っていた。しかし、彼以外のシタンカイのサマ人がこれを「自称」として用いることはまれである。

4) サマ人の呼称の問題については Nimmo [1968: 35-37] および Lopian and Nagatsu [1996: 46-48] を参照。

5) スルー諸島やマレーシア・サバ州のサマ語は、オーストロネシア語族西部オーストロネシア語派に属する [柴田 1992]。フィリピン諸語内での分類では、スルー諸島のサマ語は、北部サマ語、中部サマ語、南部サマ語の3つに大きく分類されている [Pallesen 1985]。この3つのサマ語は、それぞれの間にかかなりの方言差が認められるが、ふつうは互いに理解可能である。サバ州の言語分類では、東岸バジャウ語と西岸バジャウ語の2つの類型が用いられる [Smith 1984]。シタンカイのサマ語は、フィリピンでの分類では中部サマ語、サバでの分類では東岸バジャウ語になる。語彙、音韻、形態など様々な面で近隣のタウスグ語やマレー語の影響を強く受けている。

サマ語の音素と本論文で用いる表記の原則は以下の通りである。⁶⁾

母音は6 : i, e, a, u, o および ə (中舌・半狭の [ə])

子音は17 : p t k q
 b d(r) j g
 m n ñ ŋ
 s h
 l
 w y

(1) 文中では、/ə/ は ['] , /ñ/ は ny, /ŋ/ は ng と記す。

(2) r は母音間に現れる d の異音であると考えられるが、語彙によってはかなり明瞭に現れていることがある。音素としては確定しないが、そうした場合には r で記すことにする (例 : *nakuraq*)。

(3) 声門閉鎖音は q で表す。

(4) 母音間に現れる q は省略する (例 : *alaqat* > *alaat*)。

(5) 反復の形態をとる語彙は [-] でつなぐ (例 : *t'bbat'bbahan*)。

(6) アクセントは基本的に後ろから2番目の音節にある。特に表記はしない。

II-1-2 社会組織

サマ人の社会には、出自原理に基づく明確な社会集団は形成されていない。かつてかれらが舟上生活を営んでいたとき、1つの舟で生活を共にしていたのは、ふつう1組の夫婦とその未婚の子供という基本家族であり、これがもっとも主要な社会単位であった。基本家族をサマ語では *mataan* (> *mata* = 「眼」) という。次に重要な社会単位は、停泊地や漁場における複数の舟、つまり複数の基本家族の結び付きによって構成される単位 (family alliance unit) であった [Nimmo 1972; Sather 1978]。この単位は *pagmundaq* (「船団」の意 > *mundaq* = 「舳先」) と呼ばれる。1つの *pagmundaq* 内における基本家族の結び付きは、*nakuraq* と呼ばれるリーダー (男性であることが多い) からみて、妻のキョウダイ、姉妹、母のキョウダイなど女性を通じた関係を基にして形成される傾向がある。ただしこうした結び付きは、舟上生活の際には決して固定的ではなく、流動的で一時的なものでしかなかった [Sather 1985]。

定住化して杭上家屋に住むようになった現在では、1つの基本家族だけが生活の単位になるようなパターンは減少し、1つの家屋に住む複数の基本家族が主要な社会単位を形成するようになった。この単位は *dalumaq* (*da* = 「1つの」 *lumaq* = 「家屋」) と呼ばれる。ここではこの単

6) ここに挙げたサマ語の音素表については、Sather [1968:206] を参照した。なお本文中のサマ語は、地名を除きすべてイタリックで表記した。

位を「世帯」と呼ぶことにする。かつて停泊地において *pagmundaq* を形成していた複数の基本家族は、1つの世帯を形成するか、あるいは近隣にかたまって住むようになる。1つの世帯は、平均的には2つか3つの基本家族で構成されている。サマ人の居住パターンは、結婚の初期においては、妻方居住が理想であり、現実にもこのパターンが多い。⁷⁾ よって1つの世帯の典型的な構成は、1組の夫婦（多くの場合その家屋を建てた者）とその娘夫婦、時にはその孫娘夫婦、である [Nimmo 1972: 57-58]。

結婚の相手は、近いイトコどうしが理想とされる。⁸⁾ シタンカイにおける結婚パターンをみると、その8割近くが何らかの血縁者どうしであり、ほぼ3割が第3イトコ以内のイトコどうしであったという [ibid.: 60-61]。

サマ語の民俗語彙で「親族」にあたるのは *kampung* である。*kampung* とは Ego の父方母方を双方向的に等しく辿る血縁的な関係者、つまりキンドレッドの範疇にある人々であるとされる。ただしそれは、キンドレッドの範疇にある人々一般ではなく、たいていは地縁的な、あるいは個人的に密接な関係にあるキンドレッドを選択的に指示している [Nimmo 1972: 34; Sather 1978: 175-176, 191]。なお筆者が聞いた限りでは、かれら自身によるその説明は、必ずしも明確ではなかった。*kampung* とはある有力な祖先から派生した（と推定される）全系出自的なあらゆる関係者を指すという場合や、自分やキョウダイの姻族も *kampung* であるとみなす場合もあった。⁹⁾ いくつかの伝統的な儀礼においては、互いに *kampung* 関係にある（と推定される）一群 *dakampongan* が中核的なメンバーとなる。しかし、そうした儀礼のとき以外に *kampung* 関係が特に意識されることは少ない。

II-2 調査地

II-2-1 歴史的背景

フィリピンのミンダナオ島南西部サンボアング *Zamboanga* から、マレーシア・サバ州東北端にかけてスルー諸島がある（図1）。その南西端にシタンカイは位置している。シタンカイ島は、面積が500 km² 強（トゥミンダオ *Tumindao* 島周辺）におよぶ広大なサンゴ礁の中の小さな離水サンゴ礁島である。その周囲は3~4 km ほどしかない。

7) ただし、妻の出産適齢期が終わるころまでには、夫は独立した自らの家屋を持つことが望まれる [Sather 1978: 181]。

8) イトコどうしの結婚では、父方母方は特に意識されないが、父方平行第一イトコどうしの結婚は禁忌とされる。兄弟の子供は、実際のキョウダイと同じように、一つの、つまり「同じ精子」*daboheq* を持つとされるからである [Sather 1978: 186]。

9) 親族指示名称では、姻族は血族と明確に区別されている。なお、サマ人の親族指示名称は、直系と傍系が明確に区別され、父方と母方の親族、あるいは男系と女系を辿っての親族が区別されないいわゆるエスキモー型である。親族名称の詳細は Nimmo [1972: 38-39] および Sather [1978: 191-192] を参照。

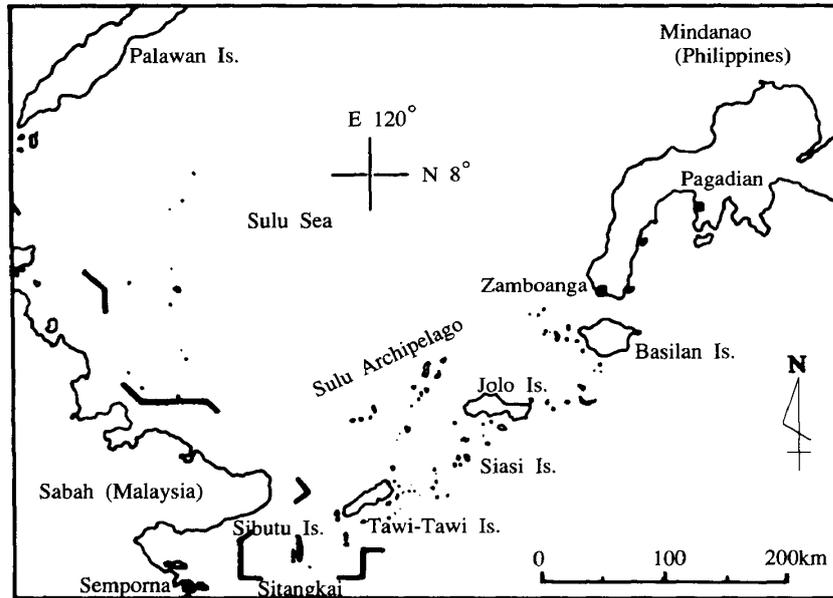


図1 スルー諸島とその周辺

この島には今世紀初頭まで定着した住民はいなかった。周辺域を家舟（えぶね：舟上居住していたときのその舟）の停泊地としていたサマ人がその陸地部分を墓地として利用しているだけであった。1900年前後に、海産物の買い付けのために華人がここに住みはじめる。これがシタンカイの最初の定住者である。以後、この華人との取り引き（衣類、漁具、タバコなど）に魅かれ、舟住まいのサマ人やサマ・デヤ人などがここに集まってくるようになる。その後のアメリカ統治期には、治安も維持されるようになった。また、学校も建てられた。日本占領期には、華人やサマ人はシタンカイを離れるが、戦後には戻ってくる。その後サマ人はここに杭上家屋を築き、定着し始めるようになる。1970年までには、多くのサマ人が舟上生活をやめて定住化していった [Nimmo 1972: 131-135]。

こうしてシタンカイはサマ人の居住地として拡大していったのであるが、70年代に入るとタウスグ人など他の民族集団が、ホロ Jolo 島などのスルー中部からタウイタウイ Tawi-Tawi 島やシタンカイ島に流入するようになり、シタンカイの状況は一変する。この流入の原因としては、この時期に始まったアガルアガル海藻の養殖の適地を得るため、MNLF (Moro National Liberation Front) などのムスリム分離独立勢力とフィリピン政府軍との内戦を避けるため、およびタウイタウイが行政区のなかで県 (province) として独立し (1975年)、その結果生じた新しい政治ポストや経済的利益を求めたため、等が考えられる [Nimmo 1986: 26-29]。

この結果シタンカイの人口は、タウスグ人を中心として急速に増加する。しかしその一方で、タウスグ人の流入をきらったサマ人はサバ州に逃げていくようになり、シタンカイのサマ人の人口は逆に減少する。Nimmo [ibid.: 29-30] の推計によると、シタンカイの人口は、1966年に

約3,400人であったのが、1982年には2万人近くにまで増加した。¹⁰⁾ これに対し、兩年のサマ人の人口は、1,400人から600人へと半減している。

調査地で聞いた話から推測すると、1994年時のシタンカイ（周辺海藻養殖のための杭上集落を含む）の人口は3万人近くで、タウスグ人とサマ人の人口がそれぞれ1万人弱程度、ついでシアシ Siasi 島から来たサマ（サマ・シアシ）人とサマ・デヤ人が数千人程度、であると思われる。サマ人の人口に関しては、Nimmo が推測した600人という数字から極端な増加がみられる。これは、アガルアガル海藻の養殖がシタンカイ周辺で栄え、またシタンカイがその流通の中心地になっていることから、いったん流出したサマ人などがアガルアガル海藻関連業をもとめて戻ってきたためであると思われる。

II-2-2 シタンカイの集落と生活

シタンカイ島から東に向かって、コンクリートで作られた2つの歩道が伸びている。その歩道に挟まれた人工の運河の周囲に浅瀬がある。シタンカイの集落は、その浅瀬に建てられた杭上家屋群である。島の陸地部には、墓地や学校があるのみで、家屋は建てられていない。運河を挟む兩岸のコンクリートの歩道に沿って、タウスグ人やサマ・デヤ人が経営する商店と喫茶店が連なっている。主食となるコメやキャッサバ、野菜、果物、缶詰、油などの食料品、網を作るナイロン糸、鋸の刃、釣針などの漁具、ガソリン等の生活に必要な物資の他、ラジカセやカメラ、衣料品などほとんどあらゆる品物は、シタンカイの商店で購入することができる。

島に近づいたところの運河の横には、公設の魚市場がある。ここで魚を販売するのは、もっぱらタウスグ人とサマ・デヤ人である。サマ人が市場で魚を売ることはほとんどない。サマ人は魚を海上で仲買人に売り渡すか、干して近隣の仲買人に売るとのどちらかの販売方法をとる。¹¹⁾

この運河から枝葉状に延びる木製の通路が、各杭上家屋を結んでいる。一般的なサマ人の家屋は、浅瀬に杭を建て、大潮時の最高潮位（2mほど）より少し高い位置に木で床を組んだその上に作られる。ほとんどすべての家には露台 *pantan* があり、魚やアガルアガルの乾燥の場として、あるいは通路として利用されている。一階だての平屋型の木造家屋がもっとも一般的である。

水・電気の公共の供給はない。島には井戸はないので、水はすべて天水に頼っている。5、6世帯に1つ程度の割合で、コンクリートで作られた箱型の貯水槽がある。これを所有していない世帯は、貯水槽の所有者から4リットル5ペソ¹²⁾ 前後で水を購入する。乾天が続くときには、井戸のあるシブツ島から水を買うこともある。いくつかの世帯（サマ・デヤ人かタウスグ人）

10) 寺田 [1996: 226] によれば、政府統計上のシタンカイの人口は1980年の段階で27,419人であったという。

11) 前者は「(種類等に関わらない目分量での) まとめ買い」 *padjak* と、後者は「(種類、大きさ別での) 量り買い」 *timbang* と呼ばれる。

12) 1ペソは約4円(1994年)。

が自家発電機を個人所有しており、電気を有料で供給している。

シタンカイでの生活は、完全に現金経済に編入されている。コメやキャッサバ、水、漁具の他、時には副食の魚までも現金で買う。サマ人に現金収入をもたらしているおもな生業は、魚介類の採捕・採集とアガルアガル海藻の養殖である。アガルアガルの養殖は、この地域では70年代の半ばに始められた。近年では、定期的な現金収入をもたらすアガルアガル養殖に生業をシフトしていくサマ人が増えている。シタンカイのサマ人の半数以上は、アガルアガル養殖に従事していると思われる。他にマレーシア・サバ州との間を大型船外機付きのボートで往復し、アルコール飲料やタバコ、あるいは人を運ぶ「密貿易」をおこなうサマ人もいる。

III サマの漁撈活動の概要

III-1 漁法の概略

サマ人のおもな漁撈活動は、①複合的技術（舟と網と人力など）を要する魚類の採捕、②単純な技術（人力のみ、あるいは簡単な罟）による貝類などの採集、¹³⁾ ③アガルアガル *agal-agal* と呼ばれる海藻の養殖、に分けることができる。現在、経済活動として重要な位置を占めているのは①と③である。アガルアガルの養殖については既に別稿で紹介したことがあるので〔長津 1995b〕、ここでは簡潔に記すにとどめる。アガルアガルとはキリンサイ属の海藻である。干潮時の水深が60 cm 前後のサンゴ礁内の礁原に2本の杭を距離をあけてたて、それをビニール製の紐でむすぶ。そのビニールの紐に20 cm ほどの間隔で海藻の株を繋ぎとめておく。2カ月ほどで収穫できる。収穫した海藻は乾燥させて売る。シタンカイ周辺のサンゴ礁には、この養殖を目的とする多くの海上杭上集落（1集落は20~100軒ほどの家屋からなる。以下、海藻養殖集落と呼ぶ）がある。

①には様々な種類の方法（漁法）がある。筆者は調査期間中に、サマ人が採用しているおもな漁法15種類を観察した。各漁法の詳細は<Appendix>を参照されたい¹⁴⁾（以下、本文中で記す漁法の後の角括弧は<Appendix>の番号に対応する。例：蔓を使った追い込み漁〔1〕は、<Appendix>の〔1〕 *angalakod* 漁を指す）。15種の漁法は、網漁（9種）、釣り漁（3種）、突き漁（2種）、その他の漁（植物の毒を使った魚毒漁）（1種）に大きく分けられる。サマ人の漁

13) クモガイ、トラフジャコ、タイワンガザミ、シラヒゲウニ、イソギンチャク（以上自家食料用）、ホシダカラガイ（殻を網の沈子に使う）、ナマコ（商品）、シャコガイ（自家食料用あるいは身を干して商品とする）などが頻繁に採集される。トラフジャコに対して簡単な罟を使う他は、素手か大型のナイフを使って採集する。なお魚介類の和名については、益田・荒賀・吉野〔1980〕、益田ほか〔1986〕、益田・アレン〔1987〕、奥谷（編）〔1994〕を参照した。同定の方法、本論および<Appendix>の魚介類の学名、およびサマ語方名については、長津〔1995a: 36-40, 96-97〕を参照のこと。

14) サマ人の漁法の多くは、サンゴ礁内の微地形の諸特徴（潮汐の状態や魚の習性を含む）に着目している。サマ人の漁法の詳細を空間認識と対照できるようにするため、および漁撈技術に関する資料とするため、それぞれの漁法の説明は本文からはずし、まとめて<Appendix>とした。

師は、ふつう多数の漁法に通じている。筆者が滞在していた海藻養殖集落のある漁師¹⁵⁾は、アガルアガル養殖に従事する一方で、8種（網漁5種、釣り漁1種、突き漁1種、魚毒漁1種）の漁法を取り混ぜておこなっていた。サマ人の漁師は、季節や潮汐の状態に応じて漁法を選択している（漁具は日常的に貸し借りされる）。

おもな漁具は、ナイロン製の漁網と釣り具（ナイロン製の糸と釣り針。竿は使わない）、鋸（固定式の3～4又刃の *pogol* と着脱式の1本刃の *sangkal*）である。網揚げなど一連の作業はすべて人力で、機械化はされていない。主要な舟は次の2種類である。1つは、くり舟をもとに舷側板を張り合わせた伝統的な型の舟¹⁶⁾で、*lepa* と呼ばれる。かつては家船として広範に使用されていた。全長は6～8m前後、幅1.5m強、深さが1m弱程度のサイズが一般的である。現在、その数は減少の傾向にある。もう1つは竜骨のある構造船で、エンジンを付けるために船尾は切り落とされた形になっている。これは *tempel* と呼ばれる。全長は6～10m前後、幅1.5m前後、深さ0.7m前後程度のサイズが多い。現在もっとも一般的に使用されている。他に *boggoq* と呼ばれる2～6mの長さの丸木舟がある。舟を漕ぐ道具には、長さが4m前後の梶 *sohaq* と、長さが1.5m前後の櫂 *busay*（水をかく側が片方だけ）がある。エンジンはかなり普及している。船内後部に固定する10～15馬力程度の小型のエンジンが最も一般的である。

以下では、3種の漁撈活動のうち①の複合的技術による魚類の採捕活動に焦点をおいて、その空間的背景とメンバー構成の概略を記す。

III-2 漁撈活動の空間的背景

サマ人の漁撈活動のほとんどは、*t'bbā* と呼ばれるサンゴ礁空間でおこなわれる（〈Appendix〉参照）。*t'bbā* という語彙は、同時に「漁場」を意味する。サンゴ礁を越えた *s'llang* と呼ばれる深い海でサマ人が漁撈活動をおこなうことは少ない。サマ人の漁撈活動の特徴は、端的にはそれがサンゴ礁という独特の空間でおこなわれることにあるといえる。その分類や位置づけについては次章で検討する。ここでは、サマ人の漁撈活動に関連するサンゴ礁のおもな空間・地形的特徴について簡潔に記す。

サンゴ礁の諸特徴のうち、漁撈活動の技術的な面に最も深く関係しているのは、その底質の特徴である [西村 1974: 86]。サンゴ礁では、島の周囲の浅瀬の一部を除いて、漁場となるところにはサンゴ群が密集、あるいは点在しているのである。

サンゴ群は魚の住処・索餌・産卵場所であるため、その周辺は魚が豊富であり、¹⁷⁾ 釣り漁 [10]

15) S氏：47歳（男性）。

16) かつては、さらに異なる「伝統的」な型の舟があった。サマ人の舟については Nimmo [1990b] を参照。

17) 「熱帯低緯度における（海洋生物の）純生産量の平均は、熱帯のサンゴ礁海域でもっとも高く、単位面積当たり 2,500kg/m² である」 [秋道 1995: 23]。

や夜の突き漁 [13]、魚毒漁 [15] などの際には主要な漁場になる。サンゴ群は容易に探知できる漁場を提供しているといえる。しかしより重要なのは、この特徴は網を用いる漁法に対しては制約になることである。サンゴ群という障害物があるため、サンゴ礁では、底質が泥や砂である島の縁の一部の浅瀬を除いて、海底を曳く網漁は不可能である。よって網を使う漁では、「魚を追い込む（水面を叩く、舷側版を叩く、蔓や縄をひく、潜る）」か、「魚の移動を遮る（刺し網）」ことが基本原理になっている。数種類の追い込み漁 [1] [2] [4] は、サンゴ礁の底質特徴に対する技術的適応としてサマ人が発達させてきた代表的な漁法といえる。

サンゴ礁では水深数 m 程度の浅い海が卓越していることも、漁撈技術に対する制約の1つであろう。こうした浅い海では、大型漁船での操業は不可能である。そのため網揚げなどの作業の動力化、漁具の大型化は困難である。また、シタンカイの集落の周辺には、干潮時に海底が海面上に露出するような浅瀬が特に多いため、漁舟に限らずあらゆる舟の出航時間そのものが、潮汐の状態に制約される。

技術的な面では直接的に関係しないが、サンゴ礁内の海がたいてい「凧」の状態に保たれていることも、サマ人の漁撈活動のあり方と大きく関連している。凧の状態が保たれるのは、サンゴ礁の外縁部（礁縁）が外洋の波や潮流の進入を防ぐ砕波帯になるためである。

サマ人は、全長5~10 m程度の小型の舟で漁撈活動をおこなう。漁場での舟の操作にはおもに棹を使うが、その際に操作者は舳先に立つ。また、海上で数日間そうした小舟に寝泊まりしながら漁を続けることもある（たとえば集団追い込み漁 [4] や一時的定置網漁 [7]）。数週間ないし数カ月間を舟上で過ごす家族もある。あるいは、次の節でみるように、サマ人は夫婦とその未婚の子供から成るメンバーで漁をすることが多い。女性も直接的に漁に参加する。こうした漁撈活動のあり方は、それがおこなわれる場、つまりサンゴ礁空間がほぼ恒常的に凧に保たれていることを前提としている。なおシタンカイは、台風の進路からは完全にはずれている。ただし、北東季節風時（12月~2月頃）にはややきつい風が吹く。

潮汐の変動の重要性をここに付け加えておきたい。朔望周期の半分の約15日を1周期とする潮汐の変動（大潮・小潮など）は、サマ人の漁撈活動において特に重視されている（表1）。これは、サンゴ礁空間でおこなわれる漁撈活動にのみ特徴的なことではない。しかし、浅く広大なサンゴ礁では干満の潮汐の変動に応じた魚の移動が顕著であり、またその移動の場になるか否かはサンゴ礁内の微地形の差ではっきりしている（つまり網入れの場が特定しやすい）。そのため、サマ人の漁法をみると潮汐に対応する魚の移動習性に着目した漁が少なくない（追い込み漁 [1] [2] や刺し網漁 [5]、クロサギ囲い網漁 [8] など）。移動習性に着目した漁法以外のいくつかの漁法でも、微細な潮汐の差がその鍵となっている（たとえば魚毒漁 [15]）。さらに先に述べたように、出帰漁の時間も潮汐の状態に制約される。こうした理由から、サンゴ礁の潮汐の変動は、サマ人にとってはより重要であると思われる。

表1 月周期の潮汐変動のおもな区分とその名称 (t. は *tahik* の略)

大きな区分	分類名称	説明
大潮 (<i>tahik heyaq</i>)	① <i>t. bahau</i>	「新しい潮」。はっきりした干潮(潮の流出入)が確認される。大潮の始まり。1~2日
	② <i>salambat</i>	①を含む。大潮のはじめの数日
↓	③ <i>t. heyaq</i>	②の後の数日間の大潮は単に <i>t. heyaq</i> と呼ぶ
小潮 (<i>tahik dikiq</i>)	④ <i>magansoq sangom</i>	「夜になって潮が満ちる」。大潮と小潮の境の数日。この潮の途中から小潮になる
	⑤ <i>apitas subu</i>	④と重なる。「朝に(潮が)去っていく」の意
	⑥ <i>t. p'llut</i>	「汚れている潮」。干潮時の潮差が小さく、潮の流れが緩慢になり、潮留まりができる。1~2日
	⑦ <i>t. amatay-matay</i>	「死にかけの潮」。はっきりした干潮(潮の流出入)が確認されなくなる潮の始まり。1~2日
	⑧ <i>amangat</i>	⑦を含む。はっきりした干潮が確認されない。数日
	⑨ <i>t. amatay</i>	⑧と同じ潮を指す。「死んだ潮」
	⑩ <i>tahik-tahikan subu</i>	「朝の小さな潮」。朝に満潮の潮をわずかだが確認できる。1~2日
↓		
大潮	<i>t. bahau</i>	「新しい潮」・・・

III-3 漁の共働者構成

サマ人の漁撈活動においては、*nakuraq* と呼ばれるリーダーが主導的役割を果たす。*nakuraq* の任務にあたるのは、通常メンバーの中で年配の、漁の技術や知識に長じた人物である。舟やエンジン、あるいは網の所有者が必ずしも *nakuraq* になるわけではない。サマ人の漁撈活動には雇用者一被雇用者、いわゆる網元一網子関係に基づく操業システムは基本的にはない。¹⁸⁾ 漁法・漁場の決定、漁撈活動の指揮、漁獲物・収益の分配は、*nakuraq* にゆだねられている。

女性も漁に参加する。舟上での魚の処理・加工といった間接的な作業に限らず、操船、追い込み漁に使う蔓および網の引き揚げという直接的な役割を担うことも少なくない。多くの漁は、女性が実際に漁獲作業に参加することを前提に組織されている。ただし海に入って、魚を追ったり、網を曳くことはない。

共に出漁し、1つの漁撈活動の際に何らかの作業を分担しあう人間のことをサマ語で *abay* という。また、互いにその関係にあることを *magabay* という。この関係にある人どうしを共働者と呼ぶことにする。サマ人の漁撈活動のもっとも一般的な共働者構成は、夫婦とその未婚の子供という基本家族、あるいは夫婦だけ、夫婦のどちらか一方とその子供である(通常男性を含むが、まれに女性だけのこともある)。こうした構成を基本家族型構成と呼ぶことにする。この

18) 近年になってごく少数であるが、サマ・デヤ人の魚仲買人が大型の網をサマに貸し付けてその漁獲物を優先的に買い受けるという、網元一網子関係のシステムでの操業が始まっている。またセンボルナでは、内戦を逃れて70年代から流入したサマ人の新来者(newcomers)が、賃労働で得た現金を持つ同じサマ人の元来の住民に対し網子(clients as crews)化する例があることを Sather [1984: 24-25] が報告している。

構成で漁をおこなう際には、通常1隻の舟のみを用いる。おこなわれる漁法は、突き漁、網漁、釣り漁、魚毒漁等の1隻の舟でおこなうことが可能な漁法のほとんどすべてである。

1隻の舟でおこなわれる漁でも、基本家族型構成によらない場合がある。夫婦、親子以外の共働者関係としては次のようなパターンがある。①男性と女性のキョウダイ。②兄弟。③兄弟関係ではない男性どうし。④基本家族型構成と他の男性(まれに女性)。こうした構成でおこなわれる漁も、基本家族型構成の場合のそれとほとんど同じである。ただし、簡単な夜突き漁[13]のときに男性どうしが同船することはほとんどない。③④のケースでは、妻あるいは娘を通じて結び付いた男性どうし(義理の兄弟、妻どうしが姉妹である2人の男など)が共働する傾向が強い。

複数の舟でおこなう代表的な漁は、一時的定置網漁[7]と集団追込み漁[4]である。前者は3月から9月の間の月齢7~10日にだけ、後者は年に1回か2回だけしかおこなわれない。他に蔓追込み漁[1][2]やクロサギ囲い網漁[8]などもしばしば複数の舟でおこなわれるが、一時的定置網漁や集団追込み漁に比べると規模はより小さい。

複数の舟が1つの漁を共におこなうときのその船団 *pagmundaq* は、おもに *nakuraq* の血縁関係者で構成される。かつての集団追込み漁では、100隻もの舟が1つの船団を構成することもあったという。一時的定置網漁や集団追込み漁の船団は、その漁がおこなわれる間にだけ固定的になるが、普段は各々の舟が独立的に漁をしていることが多い。

表2に挙げた一時的定置網の事例をみればわかるように、この船団の各々の舟のメンバーも女性を含む基本家族型構成が多い。また、その全体としての共働者構成のパターンも、*nakuraq* からみると、妻や娘などの女性を通じたつながりが選好されていることがうかがえる。

IV 生活空間の民俗分類

IV-1 シタンカイ周辺域の地形の概要

シタンカイの集落は、トゥミンダオ島を中心とするサンゴ礁内の小島シタンカイ島の、東側の浅瀬にある杭上家屋群である。かつてはサマ人は、シタンカイとサバ州のセンボルナ Semporna との間に点在する多くのサンゴ礁を移動しながら漁撈活動をおこなっていた(図2参照)。しかし現在のおもな漁撈活動圏は、シタンカイとトゥミンダオ島を囲むサンゴ礁の南側半分と、その西のタラパン Talapan 礁とその南北に散在するサンゴ礁、および水道を挟んで東側のシブツ島の南にあるサンゴ礁である。以下にシタンカイ周辺(南西部)のサンゴ礁地形を概観してみよう(図3参照)。¹⁹⁾

19) この項は、おもにサンゴ礁地域研究グループ(編)[1990]の沖縄におけるサンゴ礁についての各論文を参考している。

表2 一時的定置網漁 [7] の共働者構成

船団1		1.A(50)/2.N(20)/3.M(25) 4.P(45)/5.L(20)/6.M(23) 7.P(55)/8.N(20)/9.A(28) 10.K(26)/11.B(22)
船団2		1.L(65)/2.B(30)/3.N(35) 4.I(70)/5.B(40)/6.A(50) 7.S(27)
船団3		1.A(65)/2.K(60)/3.N(35) 4.I(30)/5.P(28)/6.M(25) 7.B(22)/8.S(25)

□キョウダイ △：男 ○：女
 =婚姻関係 △○：非参加者
 ㄗ親子

注：1994年5月16～18日に Siantuk にて観察。
 破線で括ってあるのは1つの舟の共働者。
 1は *nakuraq*，右側に記したのは名前の頭文字と自称年齢。
 子供は省略してある。

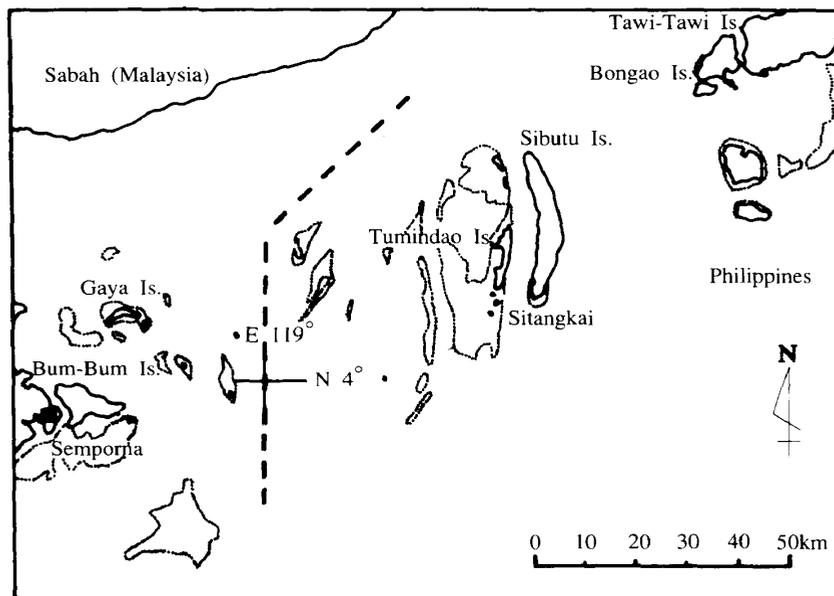


図2 スルー諸島南西端シタンカイ周辺 (点線で囲んであるのはサンゴ礁)

シタンカイやシブツ島を取り囲むサンゴ礁は、小堡礁 (barrier reef) と環礁 (atoll)²⁰⁾ である

20) サンゴ礁は、その形態と生成の様式から大きく裾礁、堡礁、環礁(内側に島がない礁)に区分される。堡礁は、一般に10 m以上、場所によっては100 mを超すような深くて広い礁湖を持ち、裾礁はより浅い礁湖を抱く [堀 1990: 11]。

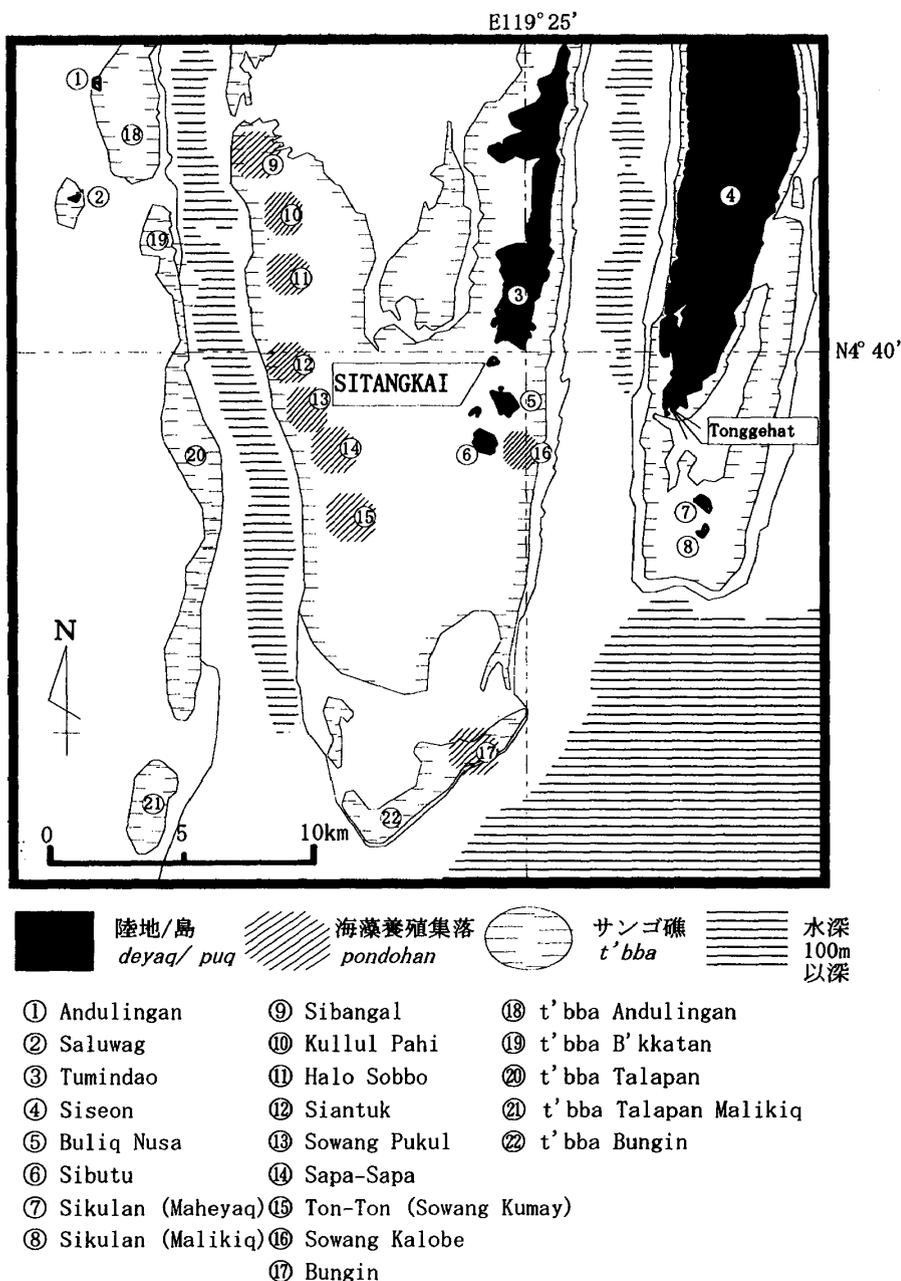


図3 シタンカイ周辺のサンゴ礁と海藻養殖集落

注：U. S. C. & G. S. Chart No. 4515. Sibutu Islands. Second ed., 1984. Scale 1: 100,000. Defense Mapping Agency Hydrographic/Topographic Center, Washington D. C., U. S. A. を基に作成。

サンゴ礁以外の空白は、ほぼ *s'lang* (深い海/外海) に相当する。サンゴ礁を囲む線以外の実線は、水深 18 m の境目。横縞線で示した水深 100 m 以深の場所のある側がそれより深い。なお、海藻養殖集落はおおよそその位置である。

とされる [Sopher 1977 (1965) : 16]。トゥミンダオ島の北西部に、深いところでは水深 18 m 程になる礁湖 (lagoon) がある。本論では、この礁湖の他に、シタンカイ南西のサンゴ礁内のやや深い海 (深くて 6 m 程度) も礁湖とみなすことにする。ただし、これは沖縄などの浅い礁湖

を指す礁池 (moat) という語で示す。

シタンカイ周辺のサンゴ礁の東側と西側には、水深 200 m に達する南北に細長い水道 (channel) を含む深い海がある。サンゴ礁の端からこの深い海に落ち込む急斜面が、礁斜面 (reef slope) である。礁斜面の 5~13 m 程の深さのところには、礁段 (sea terrace) という緩斜面になっている所があり、豊富なサンゴ群を持つ。サンゴ礁を縁どっているのが、礁縁 (reef edge) である。サンゴ礁域外の波が遡行するのは、水深 0~2 m のここまでである。この部分が、サンゴ礁内の穏やかな海面を保証する砕波帯 (breaker zone) になっている。所々でこの帯は途切れており、この途切れ口からサンゴ礁内に水路 (passage) が伸びる。礁縁の陸寄りに礁縁より少し深い海底になって続くのが、外側礁原 (outer reef flat) である。礁縁と外側礁原の境、あるいは外側礁原とそこから陸寄りに続く内側礁原の境には、礁嶺 (reef crest) という水深 0~0.5 m の浅瀬がみられることもある。外側礁原からさらに陸寄りには、緩やかに深くなっていく内側礁原 (inner reef flat) が続く (水深は 0~2 m)。これを過ぎると、シタンカイ周辺では水深 3~6 m 程度の、全体としては船底のような海底形状になっている地形が広がる。これが礁池である。これを経て、砂地や海草が卓越する島を囲む浜に至る。シタンカイの南数 km 先では、干潮時にサンゴ砂洲が海面上に露出する。

以上がシタンカイ周辺のサンゴ礁のおもな地形であるが、こうしたサンゴ礁内の地形構成は当然一様ではなく、様々な変異がある。南北に細長い形をしたシタンカイとシブツ島周辺のサンゴ礁でみると、両者が向き合った内側 (シタンカイの東側、シブツ島の西側) のサンゴ礁は幅が狭く、島から近距離で水道 (Tumindao Channel) に落ち込んでいく。これに対し、シタンカイの南西側のサンゴ礁は広大である。

その他の地形について付記しておく。シタンカイの家屋は、水深 1~2 m 強の浅瀬に建てられているが、その底質は固い石灰質の堆積物である。これはビーチロック (beach rock)²¹⁾ であると思われる。トゥミンダオ島やシブツ島の海岸には、マングローブ帯がみられ、時に内陸に食い込んで入り江のようになっている。これは、特にトゥミンダオ島の西岸南部で顕著である。シブツ島の西岸は、波浪の侵食で潮間帯ノッチ (intertidal notch)²²⁾ になっているところが多い。

21) ビーチロックとは、炭酸カルシウムで膠結された岩石状の固結海浜堆積物のことをいい、石灰質砂岩質のものと礫岩質のものがある [田中 1990]。シタンカイでは、鉄の棒を使ってこの部分に直径 20 cm 程の穴を 50~100 cm ぐらいの深さまで掘り、家の支柱を立てる。筆者が観察したときは、1 m 深まで掘っていた。石灰質の堆積物はさらに厚いようであった。通常はその上をヘドロが覆っている。

22) 侵食作用などで、くの字型にくぼんだ石灰岩等の磯海岸の地形のことをノッチといい、そのもっとも奥まった部分が現在の潮間帯に含まれている場合のそれは、潮間帯ノッチと呼ばれる [河名 1990]。

IV-2 サマの空間分類

IV-2-1 空間分類の包括的範疇

漁撈活動が実際におこなわれる空間は、いうまでもなく海である。そこでまず、「陸」と「海」という対立する生活上の2大空間区分を想定し、意識的に聞き取りと観察をおこなった。²³⁾ この区分は（移動などの際の方向性を意識した）相対的な空間のレベルでは、語彙によって表されることがわかった（V章参照）。

しかしながら、絶対的な空間のレベルでは、漁撈や日常生活の文脈でみた限り、この2大区分は妥当ではないように思われた。陸地は *deyaq* という語で示される。また、サンゴ礁とサンゴ礁域外の海も、それぞれ *t'bba*, *s'llang* という語で示される。しかし、このレベルでの「海」にあたるはっきりとしたサマ語の語彙がないのである。たとえば、英語のわかるサマ人（おもに小学校の教師）に、“sea”をサマ語ではどのようにいうのか尋ねると、“*tahik*”か“*lawt*”²⁴⁾との答えが得られた。同様に英語のわからないサマ人に、「この *t'bba*（サンゴ礁）と *s'llang*（サンゴ礁域外の深い海）を合わせた全体の場所・空間（*kamemon lahat*）は、何というのか」とサマ語で尋ねると、“*tahik*”か“*lawt*”あるいは「その名称は知らない」（*mbal katauwan ku dakayug on na*）との答えが返ってきた。*tahik*は、「潮（の推移）」か、あるいは「海水」そのものを指す語であり、空間としての海を表わすことは実際にはあり得ないだろう。*lawt*は、英語での“sea”という概念を理解している人かマレー語を話せる人が、この質問への答えとして「あえて挙げた」語と思われる。聞き取りの文脈以外でこの語が単独で現れることはなかった。

これらのことから、次の2つが考えられる。①サマ人にとって海水が覆う全体的な空間としての海は、概念的には明確な範疇としてあるが、特定の方名で命名されていないカヴァートカテゴリーである。②サマ人には、「海」という絶対的な空間分類範疇はない。サンゴ礁 *t'bba* とサンゴ礁域外の深い海 *s'llang* の2つが、陸地 *deyaq* と同じレベルの最上位の独立した空間分類の範疇である。ただし、「海」は相対的な方向としては語彙で示される。

筆者は次のような理由から、②の可能性が強いと考えている。すなわち、後で述べるようにサマ人の空間認識では、*t'bba*は、海側に存在するが、多分に陸的要素を備えた空間である。しかし、海水が覆うことのない本当の陸地（あるいは島）とは、明らかに別の空間であると考えられている。一方 *s'llang*は、*t'bba*が陸的な空間として言及されるときであれ、単に *t'bba*として語られるときであれ、それとはまったく別の性質をもつ空間として区別されているのである。

23) 世界観や、宇宙観といった抽象的な分類体系は、本論が扱う対象ではない。よってここでいう「空間」は、生活に直接的に関与する平面的な実体空間のみを指す。

24) 南シナ海やセレベス海のような“ocean”のことを *lawt*と呼ぶという答えもあったが、当然のことながらこうした大洋は、サマ人の日常的な利用空間ではない。なお、マレー語での表記は *laut*。

IV-2-2 サンゴ礁空間の下位分類

いずれにせよ、かれらの空間分類の上位の包括的範疇として、陸地 *deyaq*、サンゴ礁 *t'bba*、サンゴ礁域外の深い海 *s'llang* の3つがあるということではできよう。次にそれぞれの空間の利用形態の概略と、*t'bba* 内の空間の微地形を指標とした分類をみてみよう（図4を参照）。

deyaq はふつうには島の陸地を指す。シタンカイの陸地には、墓地や高校等の非居住用の建物、およびおもにサマ・デヤ人が所有するココヤシの木があるだけである。周辺の島を含む陸地にあるもので、墓地以外にサマ人が直接に利用するのは、出漁先の島の井戸水（買うこともある）、薬として用いる植物、魚毒漁のときに使う毒汁をだす蔓の根、追い込み漁の蔓、一時的定置網やアガルアガル養殖のための杭や、桿、薪、建材などに使う細木、船たてや屋根材に用いるココヤシの葉、そして食料としての果実類などである。

s'llang は、サンゴ礁域外の深い海や水道、あるいは深い礁湖で、水深が10m程度より深いところを指す。以下では外海と呼ぶ。サメを対象とする延縄漁 [12] などのわずかな例を除いて、サマ人がここで漁をすることはまれである。この外海は、別の *t'bba* に移るために乗り越える航路でしかない。ここに流れる潮流は、*t'bba* のそれとは異なる方向に流れ、別の語彙で表わされる。²⁵⁾ また、悪霊を遠くに運び去る場所とも考えられている。²⁶⁾

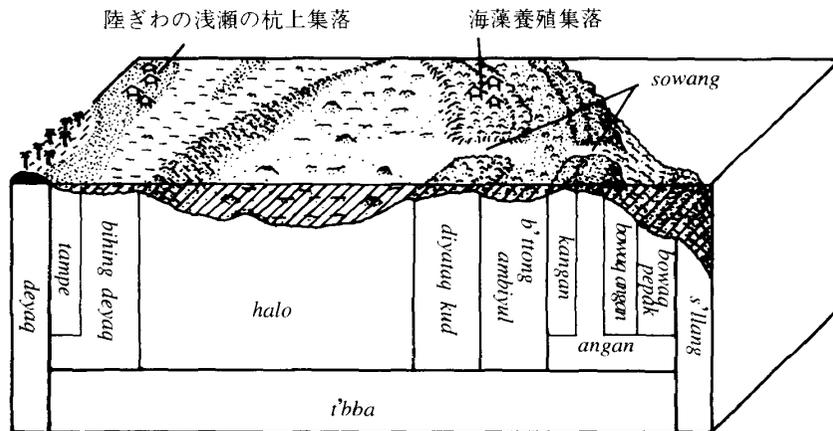


図4 サンゴ礁微地形の概略的立体図とサマ人の語彙によるその微地形の分類
注：高橋 [1990] 中森・井龍 [1990] 渡久地・吉川 [1990] を参考に作成した。

- 25) シタンカイ近辺のサンゴ礁内においては、潮が満ちるとき *ansoq* の潮流を *s'llog kawt* (=「海向きの潮流」)、潮がひくとき *lumaang* の潮流を *s'llog kaleyaq* (=「陸向きの潮流」) と呼ぶ(なぜ「海向き」, 「陸向き」と称されるのかは不明)。一方シタンカイ周辺のサンゴ礁の外側にある南北に細長い外海においては、潮が満ちるとき *son* の潮流を *laang* と呼ぶ。前者は南向きに、後者は北向きに流れる(ただし強い北風の季節 *haws* には *laang* がずっとつづく)といわれる。
- 26) *pamatulakan* という病気霊流しの儀礼のとき、その霊を乗せた模型船は、*s'llang* まで運んでから送り出す。するとそれは、そのままサバの Kinabatangan 河(病気霊の元来の土地)まで流れていくのである、と儀礼を司る *walijin* から説明を受けた(ただし実際には、*s'llang* にまで至らない *t'bba* の途中で模型船は送り出された)。

前章でみたように、サマ人の日常的な利用空間として最も重要なのが *t'bba* である。ほとんどすべての漁はここでおこなわれる。前項で述べたサンゴ礁が、サマ語での *t'bba* にはほぼ相当している。この空間は、おもに水深あるいは地形によって²⁷⁾ 次のように詳細に下位分類される。

陸地周辺の浅い浜は *bihing deyaq* (=「陸の縁」) である。シタンカイの杭上集落は、*bihing deyaq* にある。*bihing deyaq* のうち、汀線帯とその周りのごく浅い浜を *tampe* という。杭上家屋の多くはこの *tampe* に建てられている。*t'bba* 内の外海よりの他の微地形と対比されるとき、*bihing deyaq* は単に *deyaq* と言及されることが多い。*bihing deyaq* では、マングローブ湿地帯とサンゴ礁とを移動するクロサギ属を対象とする囲い網漁 [8] や、ニシン科の小魚を対象とする囲い網漁 [9] がおこなわれる。

これを越えた、海水が青緑色 (*biru boq masiq gadd'ng* =「青いがまだ緑」) で、海底が見えるか見えないかぐらいの深さになる所が *halo* である。これは礁池に相当する。このうち半径数十～数百 m 程度の小さなものは、*halo-halo* あるいは *powak* と呼ばれる。*halo* には、半径数 m の黒い塊に見えるサンゴ群や海草群が散在する。前者は釣り漁などの際、重要な標識となっている。*halo* では、釣り漁 [10] [11] や刺し網漁 [5]、舟で刺し網をひきまわして魚をからめ獲る漁 [6] などがおこなわれる。

内側礁原と外側礁原を含む広義の礁原は、サマ語では次の2つに分類される。*halo* を過ぎたところに現れる浅い礁原である *diyataq kud* (あるいは *kud*) と、それよりも深い礁原の *b'ttong ambiyul* (あるいは *ambiyul*) である。²⁸⁾ 両者は水深で区分される。その違いは、干潮時に舟 (*lepa*) が、*diyataq kud* では通れない (*mbal makalabay*) が、*b'ttong ambiyul* では通ることができる (*makalabay*)、と説明される。²⁹⁾ 干潮時には *diyataq kud* は海面に露出することもある。一時的定置網漁 [7] では、*diyataq kud* から *b'ttong ambiyul* にかけて網を設置する。両者において、夜の突き漁 [13] や魚毒漁 [15] などがおこなわれる。アガルアガルの養殖畑とその作業のための杭上家屋は、おもに *diyataq kud* に建てられる。*diyataq kud* では、単純な技術による貝類などの採集もおこなわれる。数日間を舟上で過ごす漁の際の、寝るために舟を停泊させる場所は、ふつう *b'ttong ambiyul* である。

サンゴ礁の外海側の縁³⁰⁾ とそこから急傾斜で落ち込んでいく礁斜面で、海底の存在が視認で

27) 他に、泥 *pisak*、砂 *gusung*、海草 *unas*、サンゴ群 *batu* のように海底の構成物によって、空間を指示することもある。

28) *diyataq* は「上」の意で、*b'ttong* は「腹 (すなわち、内側)」の意である。*kud* と *ambiyul* は、地形以外の指示対象をもたない。しかしながら、本文中の2つの地形は、通常は *diyataq kud*、*b'ttong ambiyul* と呼ばれ、その「上」あるいは、「内側」という相対的な位置を示しているわけではない。それぞれは「空間そのもの」を指示する1つのセットの、すなわち意味論的には分解不可能な語彙であると思われる (たとえば、*deyom* <「内側」> *kud* とか、*kok* <「頭」、すなわち先端の意> *ambiyul* という表現は可能であっても、一般的に用いられる空間指示語彙としてはそれらは存在しない)。

29) レパの喫水線は 50～80 cm なので、干潮時の水深は、前者で 0～50 cm、後方で 80～150 cm 程度ということになる。

30) この部分は *diyataq kud* に含まれるともいわれる。

きる部分までを *angan* という。礁縁で、サンゴの死骸破片等の堆積物が低潮時に海面に露出するような礁嶺は、*kangan* と呼ばれる。*kangan* は潮流や波の影響によって形成される。礁斜面の *angan* で海底が見づらくなる所は *bowaq angan* (=「*angan* の口」)、それよりやや深く、礁段になっている所は *bowaq pepak* (=「<外海との>境目の口」と呼ばれ、下位分類される。両者をあわせて *pepak* と呼ぶこともある。*angan* は漁獲対象が豊富であるが、サマ人がここを漁場として利用する頻度は高くない。これを境にして *s'llang* につながる。その区別は、まだ海底があることがわかる (*masiq takila deyoq*) か否か、である。³¹⁾

外海から *angan*, *diyataq kud* と *b'ttong ambiyul* (一部は *halo*, *bihing deyaq*) を横断してサンゴ礁の内部に伸びる水深 2~5 m ほどの水路がときどきみられる。これは *sowang* と呼ばれる。*sowang* はサマ人の漁撈活動にとって特に重要な空間である。ここでは蔓を使った追い込み漁 [1] [2] や刺し網漁 [5] などがおこなわれる。漁場としてのみならず、潮汐の高低にかかわらず舟がスムーズに進めるサンゴ礁内の航路 *palabayan* としても重要である。こうした重要性を反映して、多くの地名に *sowang* が付けられている。³²⁾

他に、サンゴ礁からやや離れた所に海底山のように隆起したサンゴ礁 (海面には露出しない) がある。これは *takot* と呼ばれ *t'bba* に分類される。

なお、*t'bba* はサンゴ礁という空間を指示する他に幾つかの別の意味を持つ。*t'bba* という語彙は、サマ文化の文脈では極めて広い意味領域にまたがっている。それぞれについて以下に簡単に記す。

①漁場：サンゴ礁自体が多くの場合サマ人にとって漁場であるため、意味の境界は必ずしも明確ではない。しかし狭い空間を指して、*ahap t'bba* (=「良い *t'bba*」) という場合や、特定の地名として *t'bba t'ngga*³³⁾ というような場合は、「漁場」の意味で用いられているといえる。

②海底：*deyoq* (=「下」「海底」) と同義。干潮時の潮の状態を *atohoq t'bba* という。*atohoq* は「乾いた」の意味である。このときの *t'bba* は「海底」を意味している。³⁴⁾ 干潮時には、*diyataq kud* や *kangan* などの海底が水面に露出することがある。この状態を *paluwas* (=「出る」) *t'bba*

31) 地理学的分類では礁縁と礁斜面をはっきりと区別している [中森・井龍 1990]。しかし、サマ人の分類範疇である *angan* は両者を包括していると思われる。よって以下で礁縁という場合には、礁斜面あるいは礁段の底がみえるところまでを含むことにする。

32) *sowang* そのものに対する地名であることもあれば、その *sowang* の近くの *diyataq kud* にある海藻養殖集落や漁場に対する地名のこともある。*sowang ahaan* (バラフエダイ)、*sowang dapak* (ヒメフエダイ)、*sowang bukan* (クサビベラ)、*sowang kalobe* (クロヒラアジ) など、特定の魚種の名が付けられていることが多い。

33) シタンカイの南西の礁池の一部を指す地名。先の空間分類に従えば *halo* になる。釣り漁 [10] や曳き刺し網漁 [6] に特に良好な漁場であるため、*t'bba* の名で呼ばれていると考えられる。なおこの場合の *t'ngga* は、シタンカイを取り囲む広い *t'bba* の「真ん中の位置」という意味である。他にも幾つかの漁場が *t'bba* を冠した地名で表わされている。

34) 参照したサマ語の辞書では、*t'bba* は「low tide」と記されている [Walton and Walton 1992; Kunting 1989]。しかしながら調査地では、*t'bba* 一語で干潮を示すような例はなかった。

という。この場合もやはり *t'bbā* は「海底」を指している。

③動植物:サンゴ礁内にある、貝、ウニ、ナマコや海草・海藻類を包括的に指して *t'bbā-t'bbahan* という。広義には魚類を含むこともある。この *t'bbā-t'bbahan* を採集する活動を *magt'bbā* (*mag* は職業や作業を示す接辞) と表現する例にみられるように、*t'bbā* という語は、その空間にいる動植物群も指示対象として包含することもあると考えられる。

V 「陸」と「海」とサンゴ礁——サマの生活空間認識——

V-1 民俗方位観——海向きと陸向き

オセアニアから東南アジア地域の諸社会において、陸向きと海向きを指示する語彙が方位観の基盤をなしていることはよく知られている [合田 1989; 吉田 1977]。バリ島のようにこの方位観が、聖俗観その他の象徴的価値と結び付いている地域もある [倉田 1977]。サマ人の場合も同様に、海と陸の方位を示す語彙が方位観の基盤になっている。この項では、次項で扱う「陸的」空間と「海的」空間の分析につなげるために、日常生活の中で方位表現がどのように現れるのかを示すことにしよう。

サマ語には、風のくる方位、つまり北と南を軸にして東、西、東南などの方角を示す語彙がある。しかしながら、日常生活において方向を、このような方角で表わすことは一般的ではない。また、右 *kowan*、左 *gibang* という語もあるが、これも日常の生活で用いられることはまれである。

「ここ」、「そこ」といったごく身近な位置を指示詞によって示す場合を除いて、³⁵⁾ サマ人が方向を示すときに頻繁に用いる語彙は、*kawt* (海向き) と *kaleyaq* (陸向き) である。³⁶⁾ たとえば、左、右というかわりに「海向き」、「陸向き」という語彙を使うのである。また、この方向によって指示される先の場所に所在していることを示すときには、*marilawt* (海側に) / *mareyaq* (陸側に) という。

シタンカイにある杭上集落から漁に出ていくときは *kawt* で、漁場やサンゴ礁の縁近くにある海藻養殖集落からシタンカイに戻るときは *kaleyaq* である。すなわちシタンカイを中心にして放射状に広がる円周に向かうときが *kawt* であり、その円周上の側からシタンカイに向かうときが *kaleyaq* である。シタンカイを中心とするマクロな空間においてこの対立は明瞭である。しかしこの語彙が、よりミクロな空間であるシタンカイの内部で用いられるとき、示される方向はやや複雑になる。事例をみてみよう。

35) サマ語の指示代名詞は次の通り。*itu* (話者に近い位置、「これ」)、*ilu* (対話者に近い位置、「それ」)、*inaan* (話者、対話者両者から離れた位置、「それ」)、*heq* (両者から遠く離れた位置、「あれ」)。

36) 帆をはって進むときには、風上や風下のように「上」「下」で方位を表すこともある。

事例1（1994年7月20日）

シタンカイの集落にて、*sambulayan* という結婚式に掲げる旗の設置作業がおこなわれる。まず5mほどの木の棒を立てる。根元は海底の泥に差し込まれ、頂点の部分にはひもが結わえられている。そのひもは3つの方向にそれぞれ伸びており、それをそれぞれ2、3人ずつで引っ張り、棒を垂直に立てるのである。これがうまくいくよう、Y氏やS氏が大声で皆に指示を出す。「*kaleyaq* だ、違うもう少しこっち *piitu* だ。Aは *kawt* に強く引け」という。³⁷⁾ 始終、方向の指示は、*piitu/piilu*（相手のいる側）か、*kawt/kaleyaq* で出されていた。*piitu/piilu* は筆者にもすぐどちらかわかるのだが、*kawt/kaleyaq* は結局どの向きを指しているのかすぐにはわからない（運河か島のあるほうが *kaleyaq* だと説明される）。しかし、集団としての動きが混乱を起こすことはない。

外側からみると、シタンカイ全体が *mareyaq* で、その向きは *kaleyaq* である。しかし、シタンカイの内部でも *kawt/kaleyaq* が方向を指示する語として用いられる。上の事例以外でも、たとえばある人物がどこにいるのかと聞くと、「もう海の方にいる」(*way marilawt*) という答えが返ってくることもある。これは漁や海藻養殖集落に出ているという意味の場合もあるが、シタンカイ内部の、運河をはさんだ反対側の家にいるという意味でもある。一方、家から運河沿いにある商店に行くときには *kaleyaq* という。

2つのレベルの *kawt/kaleyaq* の指示方向を表わすと図5のようになる。ミクロなレベルでの *kawt/kaleyaq* の対立では、話者から見て対象が、運河あるいは実際の陸地に向かう場合 *kaleyaq* である。しかし対象の向かう場所が、運河や陸地から見て明らかに *kawt* の方向である場合には *kawt* と表わされるといえる。別の見方をすれば、シタンカイ内のサマ人の居住領域は、マクロレベルでは *mareyaq* に、ミクロレベルでは *marilawt* になるのである。

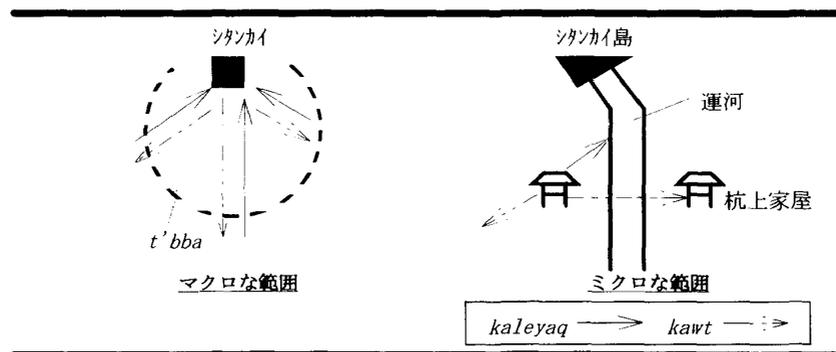


図5 *kawt* と *kaleyaq* の2つのレベルの概念図

37) Y氏：55歳，S氏：52歳，A氏：30歳。3人とも男性。

V-2 生活空間の位置づけ——サンゴ礁をめぐって

これまでに記してきたことから、サマ人にとって生活空間は、明確な境界で分けられた「陸」と「海」という二項対立のもとに構成されているのではないことがわかった。ここでは先に記した空間分類と方位観の在り方をふまえて、サマ人の「陸」と「海」観について考察し、かれらの生活空間認識をまとめる。

V-2-1 語彙の整理

まず鍵となる語彙について、Pallesen [1985] を参考に整理しておく。サマ語で陸地は *deyaq* である。先の方向指示表現では, *kaleyaq*, *mareyaq* の形態で現れた。双方とも /d/ の異音 (allophone) として, [l], [r] の音韻に変形したと考えられる。³⁸⁾ 一方 *kawt*, *marilawt* であるが, この語幹 (stem) は何であろうか。先にみたように, 「海」を示す語として *lawt* が挙げられることがあった。ka-, ma- を方向を示す形態素あるいは前置詞とみて, 語幹を分離すると *lawt* (*kawt* を *ka-lawt の形態変化とみなす) または *dilawt* が得られる。こうしてみると, 意味論的に対立し, 閉じられた意味領域を成す語彙のセットとして *deyaq* と *lawt* あるいは *dilawt* が存在するとみなすこともできる。しかし, そうだとしても, *lawt* または *dilawt* という語は, *kawt* あるいは *marilawt* という形態で, 相対的な位置を示す意味領域内においてのみ用いられるのである。それは, *deyaq* が陸地空間を指示対象とするのと同じレベルで, 「海」という絶対空間を指示対象としているとは考えられない。

V-2-2 「陸」と「海」の境

前述のように, *deyaq*, *t'bbā*, *s'llang* の3つは, サマ人の空間分類の上位の範疇であると考えられる。この項では, この3つの分類範疇と, *kaleyaq/kawt*, *mareyaq/marilawt* という相対的な空間指示表現がどのような対応関係にあるのかを検討する。

サマ人が *deyaq* という語彙で指示している対象は, 絶対的な空間としての「陸」だけではない。その対象は, しばしば文脈に依存し多層的である。便宜的な区別のために, どの文脈においても絶対的な空間として表わされる「陸」に対し, 相対的に陸 (向き) あるいは海 (向き) になるような空間を「陸的」, 「海的」と記すことにする。「陸的」, 「海的」は, それぞれ *mareyaq*, *marilawt* に対応すると考えてよい。

38) 「サマ祖語 (Proto Sama-Bajau) の *r は, 現在のサマ諸語では, l で具現される。スルーにおけるサマ諸語においては, 母音間にある d の異音が r である。この異音は, アラビア語, スペイン語, 英語の音韻体系の影響を受けて, 音素になりつつある。そして, スルー諸語の実際のアルファベット表記では, r と d の区別は既に認められている」 [Pallesen 1985: 56]。現在のサマ語では, 依然 r は d の異音であり, 対立が確認される音素としては確立されていないように思われる。ただし, いくつかの r の音は d の音との互換が不可能であるようにもみえた (たとえば *nakuraq*)。 *kaleyaq* は *deyaq* から派生したと考えられるが, これはサマ語の音韻の規則には反している。

シタンカイ内部という最もミクロな空間においては、先に記したように、運河と陸地のある所が *deyaq* で、自らの居住場所は「海的」な空間に属するとサマ人は考えている。この文脈をレベル1とする。

t'bba 内部の空間においては、陸地周辺の浅い浜 *bihing deyaq* は *deyaq* と言及されることが多い。

事例2 (1994年7月8日)

伝統宗教の職能者の一人であるJ氏の話。³⁹⁾ この日まで約1週間ほど強い南風の日が続き、多くの人が出漁できなかった。

筆者「こんな風ของときはどんな漁をするのか。」

J氏「風があるときは、陸で (*mareyaq*) 漁をするしかない。」

bihing deyaq でおこなわれる漁 (クロサギ囲い網漁 [8] やニシン科の小魚の囲い網漁 [9] など) は、「陸での仕事」*usaha mareyaq* と表現されることが多い。このときには、*halo* など *s'llang* よりの他の *t'bba* が「海的」な空間であると考えられているのである。また、*mareyaq* でおこなう漁は、誰にでもできる簡単な価値の低い仕事であり、本当のサマ人の漁ではないと説明される。この文脈をレベル2とする。

話者が自分の位置している空間を *t'bba* と *s'llang* の対立のもとに捉えているときには、*t'bba* が「陸的」であると認識される。

事例3 (1994年9月18日)

夜、N氏とA氏⁴⁰⁾ がおこなうエイ突き漁 [14] に同行する。エンジンで進む。目的地は、*s'llang* を越えたタラパン礁 (*t'bba Talapan*)。N氏に舳先で、地形の分類とヤマアテの方法について聞く。Ton-Ton 集落の北側を通過し、礁縁 *angan* に近づいたサンゴ礁内の水路 *sowang* での聞き取り。

筆者「このような暗闇でどのように進路がわかるのか。」

N氏「私達は、まだ陸側にいるから (*masiq kami mareyaq*)、海底を知っている。ヤマアテの目印 (*pinandogahan*) は海底だ。しかしもうすぐ *kawt* だ (*song kawt*)。海にいる (*marilawt*) ときは、潮の流れとあの家々の明かり (横の Ton-Ton 集落を指す) が目印である。」

上の表現はまさに *t'bba* を「陸的」な空間とみなしている例である。この事例以外でも、*angan*

39) J氏は48歳の男性。多種の漁に通じている有能な漁師でもある。ここに記したのは、たまたま筆者と居あわせてJ氏が話しかけてきたときの会話の一部である。

40) 45歳と25歳。2人とも男性。

を指して *bihing deyaq* というような場合がしばしばあった。その場合も、*t'bbā* が「陸的」な空間で、*s'llang* に落ち込んでいく斜面はその縁であると考えられているのである。これをレベル3とする。

これらの3つのレベルでの「海的」な空間と「陸的」な空間の対立をまとめると表3のようになる。

以上のような「海的」空間と「陸的」空間の認識の仕方から次のことが指摘できる。*s'llang* は必ず「海的」な空間とみなされるが、*t'bbā* は文脈に応じて「陸的」「海的」空間のいずれにもなる。すなわち両義的な空間である。

表3 陸的空間と海的空間の多層性

	運河, 島	陸ぎわの居住空間 + <i>bihing deyaq</i>	<i>t'bbā</i> (<i>bihing deyaq</i> を除く)	<i>s'llang</i>
レベル1	「陸」	海的		
レベル2	陸的		海的	
レベル3	陸的			海的

V-2-3 日常空間としてのサンゴ礁

ところでこれまで「陸」と「海」という語を用いてきた背景には、前者に日常性、後者に非日常性（あるいは逆）があるのではないかと、という両者の対立関係のアプリオリな想定があった。ここで「陸(的)」と「海(的)」という見方を修正して、日常性と非日常性という点で、「陸」*deyaq*、サンゴ礁 *t'bbā*、外海 *s'llang* がどのように位置づけられているのかを探り、サマ人の空間認識のまとめとしたい。

まず、*t'bbā* と *s'llang* について次の事例から考えてみよう。

事例4 (1994年6月20日)

夕方、サメを対象とする延縄漁 [12] に同行する。シブツ島のトンゲハット Tonggehat から出漁。*nakuraq* のA氏と、L氏、T氏の3人⁴¹⁾ がメンバーである。エンジン付きの舟は、*angan* を越え *s'llang* に出ようとする。*s'llang* はやや波が高く、舟は一瞬緊張した雰囲気になる。舟は *angan* にすこし留まる。Aは、TとLに方向を指示する。それにTとLはうなずき、*paluwas kita* 「外に出るぞ」と叫ぶ。舟が動きだすとAは *bismilla* とコーランの聖句を大声で唱え、続けて次のように海に唱える。⁴²⁾

41) A氏：55歳，L氏：40歳，T氏：28歳。3人とも男性。A氏はハジ（メッカ巡礼者）。

42) ここに記したのは、延縄を入れ終えた後にA氏に聞き直してテープレコーダーで録音したものを、ハジ=ムサ氏の助けを借りて起こしたものである。

Halam tandaq kami itu Dayang Haji Jubayda. Angusaha-ngusaha, angalabuq kami laway. Daa kami sassatun. (私達には、ハジ=ジュバイダの王女が見えません。生計を立てるために延縄を入れに行きます。どうか災いをもたらさないでください。)

A氏の説明によると、ハジ=ジュバイダの王女というのは、*aa s'llang* (=「*s'llang*の人」)、すなわち *s'llang* に住む悪霊 *saytan* の一種であり、先の言葉はその *saytan* に漁をすることの「許し乞い」*amuhun* をするためのものであるという。

この事例は2つ点で示唆的である。1つは、*t'bba* から *s'llang* に移行する過程を *paluwas* 「外に出る」と表現することである。もう1つは、*t'bba* と *s'llang* には別の *saytan* が住むと考えており、*s'llang* の *saytan* に対して「実際に」許し乞いをしてから *s'llang* に渡ったことである。「実際に」と記したのは、この *amuhun* は理想的には漁をする際に必ずおこなうべきとされるが、他の *t'bba* 内での漁ではほとんど聞くことがなかったからである。⁴³⁾

t'bba を越えた海での漁を観察する機会は上のときだけであり、こうした表現を他のサマ人も用いるのかは、実際の漁撈活動において確認することができなかった。しかし、シタンカイでの聞き取りにおいても、外海とサンゴ礁には異なる *saytan* が住んでいて、*s'llang* で漁をするときにはその *saytan* に対して特別な *amuhun* を要する、という上の事例と同じような説明が得られた。*s'llang* から *t'bba* にわたることを *pasod* 「中に入る」と表現するともきいた。⁴⁴⁾ *t'bba* を(危険な) *s'llang* との対比で語るとき、*t'bba* を指して「家のような所である」*saliq lumaq* と表現する人もあった。*t'bba* と *s'llang* とは、日常—非日常という対照的な位置づけがされているといえるだろう。

では、*deyaq* はどのように位置づけられているのだろうか。II-1-1に記したように、サマ人は、シブツ島などの陸住みの、あるいはその出自でシタンカイに住むサマ人を「陸の人」*aa deyaq* と呼び、自分たちとは明確に区別している。*deyaq* の位置づけは、この呼称に端的に示されている。つまり、サマ人がしばしば言うように、*deyaq* は「かれらの場所」*lahat siga* であって、自分たちの場所ではないのである。⁴⁵⁾ ただし、それは *s'llang* のように非日常的な空間とみなされているわけではない。*deyaq* は、たとえば魚介類以外の食料を手に入れるために、日常的に往来する場所である。

これまでに述べてきたことから、サマ人の空間認識は次のようにまとめられるだろう。サマ人にとって最も日常的な空間はサンゴ礁 *t'bba* である。これに対して「陸」*deyaq* は二次的に日

43) *t'bba* 内の集団追い込み漁 [4] の際に、そのリーダー *nakuraq* が *amuhun* するのを聞いた。このリーダーは精霊 *jin* を扱う伝統宗教の職能者 *walijin* のリーダーでもある。この漁がおこなわれる契機がきわめて宗教的であったため、*amuhun* の必要があったと考えられる(長津 [1995b] を参照)。

44) 事例5のときには、この言葉は聞かなかった。

45) 実際にシタンカイの陸地部分の土地を所有しているのもサマ・デヤ人である。

常的な空間、外海 *s'llang* は非日常的な空間である。*t'ba* はまた、「陸的」とも「海的」とも言及される両義的な空間でもあった。しかしその両義性は、サマ人にとって *t'ba* が、漁撈活動の場であると同時に、その他のほとんどすべての生活の場でもあることに由来する。*t'ba* が両義的に言及されることと、それが最も日常的な空間と認識されることは矛盾していない。

V-2-4 サマのサンゴ礁空間認識の特異性

ところで、他の地域においてもサンゴ礁空間は、そこに住む人々の空間認識において、あるいはその認識に基づく利用慣行の上で、しばしば特別な位置づけがされている。ここではサンゴ礁空間をめぐる空間認識について、沖縄とオセアニアの若干の事例をとりあげて、サマ人の例と比較してみたい。

裾礁に囲まれた沖縄における空間分類では、海はサンゴ礁の内側と外側に大別される。汀線帯からヒシ（礁縁）までのサンゴ礁の浅い海は一般にイノーと呼ばれ、ヒシの外側の海であるヒシクチ（礁斜面）あるいはフカウミ（外海）とは明確に区別されている〔須藤 1978；島袋 1992〕。利用慣行の面でも、イノーの内側と外側は区別される。イノーの海は、それが接する地先の住民たちの共同利用空間、つまり入会地（コモンズ）である。かつては、地先の村落にその独占的な利用権が認められていた。イノーは、農業のかたわらに自家消費用の海産物を採取できる海のアタイグァー（自給畑）とみなされている。これに対しイノーの外側の海は、糸満漁民に代表される専門的な漁民（ウミンチュ<海人>）が利用する空間である〔多辺田 1990：244-260；武田 1990；渡久地・吉川 1990〕。沖縄ではサンゴ礁空間は、陸そのものではないが、陸の延長とみなされているといえよう。

ちなみにシタンカイの場合、サンゴ礁の一部あるいは全体について、特定の個人や集団が排他的な所有権あるいは利用権を持つことは基本的でない。⁴⁶⁾

次に、石森〔1989〕が報告するミクロネシア中央カロリン諸島のサタワル Satawal 島の事例をみてみよう。

サタワル島は、幅の短い裾礁に囲まれた小さな隆起サンゴ礁島である。サタワル島民の空間分類では、地上空間はまず島（ファヌー）と海（サート）に大別される。そして、海は裾礁のサンゴ礁（ネ・セツ）と外海（ネ・メタウ）に分けられる。なお外洋のサンゴ礁（離礁）は、裾礁のサンゴ礁とは別の語彙（ウォール）で示され、外洋の一部とみなされる。それぞれの空間ごとでのタブーの適用のされ方からみると、サタワル島民は、裾礁のサンゴ礁を陸の居住地と連続した日常的な空間とみなしている。これに対し、外洋（離礁も含む）は、陸地のタロイ

46) アガルアガル養殖畑や杭上家屋のような構造物が設置されれば、当然それを設置し利用している人にその空間の排他的な所有・利用権が認められる。しかしその権利も、その構造物が利用されている限りは認められるが、構造物が放置され朽ちてしまえば消滅する。そしてその跡地は再び無主の空間とみなされる。

モ畑と共に非日常的な空間であると考えているという。たとえば猥褻な言葉や動作などは、前者の2つの空間では厳しいタブーとされるが、後者ではそのタブーは解除される。ここでも裾礁のサンゴ礁は陸の延長であり、陸と同じ日常生活の空間とみなされているのである。ただし「非日常的」な生活空間は、利用されない空間ではない。外洋の離礁はサタワル島民の主要な漁場である。

その他、パプア・ニューギニア西部州のパラマ Parama 島やトレス海峡のマリー Murray 島のように、島の陸地におけるクランごとの境界線がサンゴ礁の端にまで及んでおり、そこまでがそれぞれのクランの所有する敷地として、排他的に利用されているところもある [大島 1992]。イリアン・ジャヤのジャヤプラ Jayapura 近郊の漁村では、ティアイティキ (*tiaitiki*) という一定期間の資源利用規制がおこなわれるが、それは陸上と同様にサンゴ礁では適用されるが、通常サンゴ礁の外側では適用されない [村井 1994]。これらもサンゴ礁空間が陸の延長と認識されている例であろう。

以上みたように、「海」をサンゴ礁と外海の2つに区別し、サンゴ礁を両義的な空間とみなすような空間認識は、サマ人の場合に限られない。しかしながら、いま取り上げた地域ではサンゴ礁は、基本的に「陸の延長」としての空間、つまり陸を「主」としてそれに従属する空間と認識されているように思われる。一方サマ人にとっては、サンゴ礁 *t'bba* があくまで「主」の空間なのである。この点にサマ人のサンゴ礁をめぐる空間認識の特異性があるといっていよう。

ただし、サンゴ礁を「主」の空間とみなしていると思われる例が他にないわけではない。秋道 [1976; 1995: 109-111, 201-202] が報告するソロモン諸島のマライタ Malaita 島ラウ Lau 地方の例を付記しておこう。

ラウの人々は、マライタ島を囲むサンゴ礁内に点在する、サンゴ石灰岩で造成した人工島に住む。専門的な漁撈民であるかれらは「海の民」と称され、マライタ島で農耕を営む「山の民」と区別される。ラウの人々の空間分類によると、地上空間はまず海 (*asi*) と山 (*tolo*) に大別される。海は多様に下位分類されるが、大きくはサンゴ礁内 (*asi namo*) と外洋 (*asi matakwa*) に分けられる。サンゴ礁内の空間のほとんどは特定のクランによって所有されている。また、追い込み漁などの主要な漁法がおこなわれる漁場には、個人的な所有権が認められている。そうした所有権が認められる空間は、サンゴ礁内に限られる。マライタ島やサンゴ礁の外には及んでいない。なお、サンゴ礁の外では主要な漁はおこなわれない。

ここでも、利用慣行とそれに応じた権利のあり方が、サンゴ礁の内と外ではっきり区別されていることが分かる。しかし沖縄の場合と違って、サンゴ礁の海は、まさにその中(人工島)に住む「海の民」の利用空間であって、地先(マライタ島)の住民の空間ではない。ラウの場合サンゴ礁空間は、陸の延長としてではなく、それ自体独立した主要な空間として分割・所有

されている。サマ人と同様に、ラウの人々にとってもサンゴ礁は、漁撈活動の場とその他の生活の場（人工島）が連続する空間であり、それゆえ「主」の空間になっているように思われる。

VI お わ り に

本論では、サマ人の空間認識について考察してきた。サンゴ礁空間 *t'bbā* はサマ人にとっては、陸住まいの人々にとっての「陸」と同じレベルのきわめて日常的な空間であり、それゆえサマ人の空間認識はサンゴ礁空間を核にして構成されていることが提示された。そのサンゴ礁空間は、「陸的」でもあり「海的」でもある両義的な空間であり、同時に最も日常的な空間であると位置づけられていることを論じた。こうした空間観が形成された背景をここで簡潔にまとめる。

III-1 で述べたようにサマ人の漁撈活動の諸特徴は、それがサンゴ礁 *t'bbā* という独特の空間でおこなわれることにあった。サマ人はサンゴ礁の自然環境に適応させる形で様々な漁獲の戦略を発達させてきた。サマ語で「漁場」一般を指す語が *t'bbā* であることは既に述べた。「漁に出る」は、エンジンを使用する場合でも *anohaq*、つまり「棹 *sohaq* をさして進む」と表現する。サマ人の漁撈活動がサンゴ礁空間に特化していたことがわかる。あるいは、サンゴ礁以外ではおこなわれえなかった、というべきかもしれない。以上のように生活の糧を得るための無二の場所であるがゆえに、サマ人はサンゴ礁空間を特別に重視し、詳細に分類・把握している、と考えてよいであろう。

しかしながら、サマ人にとってサンゴ礁が（特別に重要な空間であるとともに）最も日常的な空間であるのは、それが漁撈活動の空間であるのみならず、かつての舟上居住の際には、日常的活動（調理、食事、睡眠、性交、休憩など）の空間でもあったという理由によるであろう。別の言いかたをすれば、サマ人にとっては、死者の埋葬などの非日常的な活動を例外として、生計活動とその他のあらゆる日常的な活動はサンゴ礁空間において重複・連続していたのである。そしてこの連続性は、同時に社会関係——パートナー——の重複・連続も意味していた。共に暮らす相手が共に働く相手だったのである。こうした重複・連続性は、かつてほど完全ではないが、現在でも部分的に残っている。舟上居住から杭上家屋居住に移行した現在も、基本家族型構成で漁撈活動を続けるサマ人は少なくない。

サマ人が歴史的にサンゴ礁空間に特化していったことの原因は、陸地住民との食料やその他の物資の交換や政治的保護などの社会経済的な相互関係の過程にあると推測される (J. Warren [1981], Sather [1995] を参照)。サマ人にとってサンゴ礁は、陸地民との相互関係に規定されてはじめて生活空間として固定された。そして、それはサマ人の生活のあらゆる側面が連続的にかつ密接に関わる生活空間になった。生態学の用語をかりて比喩的に言えば、サンゴ礁空間 *t'bbā* は、サマ人の生態的ニッチェ（地位、位相）なのである。

本論で取りあげたシタンカイのサマ人は、杭上集落への定着化が一般的になっているにもかかわらず、サンゴ礁空間との密接な関係をかなり保持していた。しかしながら、たとえばマレーシア・サバ州のセンボルナのサマ人（シタンカイのサマ人と同じ出自であるといわれる）の集落では状況は異なる。ここでは、雇用—被雇用（パトロン—クライアント）関係に基づく——つまり集約的な男性労働力による——操業形態や、舟・漁具等の近代化・大型化により、女性が海に出ることはまれになった [Sather 1984; 1985; C. Warren 1983]。センボルナでは深い海あるいは外海 *s'llang* での漁撈活動が増加している。また陸での賃金労働に就くサマ人も増えている。つまり、基本家族型構成での漁撈活動は減少し、日常的活動と漁撈活動あるいは生計活動は分離してしまった。ここでは、サンゴ礁空間はもはやサマ人の生態的ニッチェではなくなりつつあるのである。本論を踏み台として、生態的基盤の変化という視角から、こうしたサマ人の社会経済的変化を考察していくことは今後の課題である。

<Appendix> サマ人の主な漁法

①語幹とその意味②漁の種類③操業人数④操業舟数（特記しない限り舟は *lepa* か *tempel*）
⑤漁の時期（季節、朔望周期の潮汐、月齢など）⑥操業の時間⑦操業場所⑧対象魚⑨主要漁具
（括弧内はサイズの一例）

*単位：f=尋，m=メートル，cm=センチメートル

*ここにあげた漁法は、すべて調査期間中に実際に観察した漁である。その観察と聞き取りをもとにこの <Appendix> を作成した。

網 漁

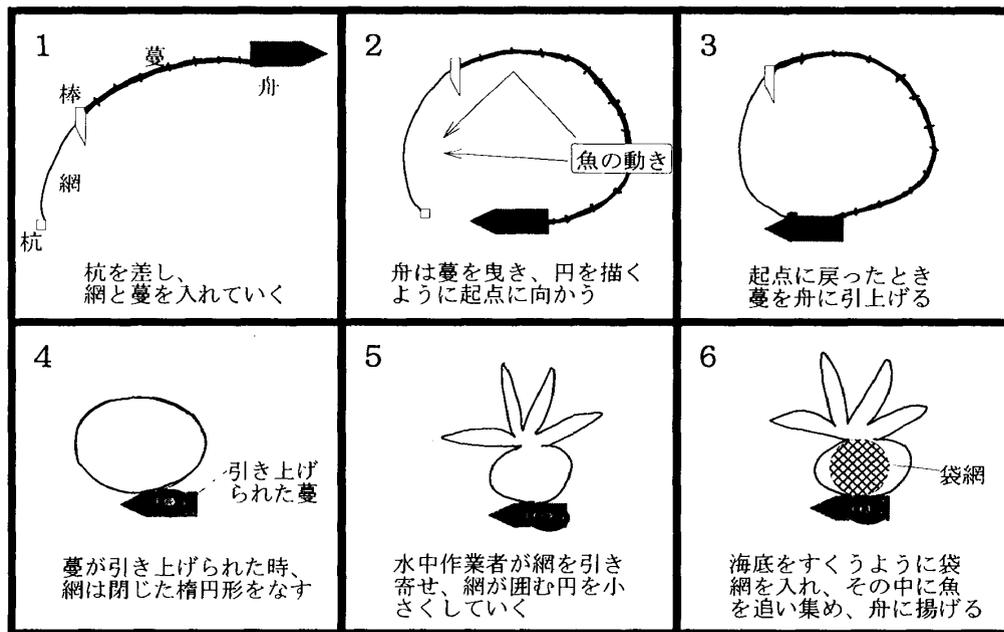
追い込み漁

[1] *angalakod*

①*lakod* = 「麻痺させる」②蔓を使った追い込み漁③2～6人④1～2隻⑤特定されない⑥満潮を過ぎるところから干潮になるまで⑦サンゴ礁内の水路 (*sowang*) ⑧クサビベラが多い（他にサンゴ礁棲の魚各種およびイカなど）⑨網（長さ200f，丈1m，目合い<網の目の1辺の長さ>6cm），蔓（500fほど）

概説：頻繁におこなわれる漁。1日に数回おこなう。引き潮時に魚が水路 (*sowang*) を移動する習性を利用し、そこに交差させて設置した網に蔓を使って魚を追い込む。漁場の水深は1～2m。(1)まず、網の先端に結ばれている杭を海底に差し込む。次いで、網とそれに繋がれている蔓を海に入れていく。網と蔓の繋ぎ目の所には、1.5mほどの棒が結び付けられている。これ

は動きに応じて海底に引っ掛かり、網と蔓の間に角度を作る働きをする(図1の1)。(2) 蔓入れ完了後、しばらく潮が引くのを待つ。そして蔓を舟で曳きはじめる。1人か2人が海に潜り、蔓を上下させ魚を脅し網の方向に追い込む。残り人間が舟を操作し、円を描くようにして起点の杭の方向に進む(図1の2)。(3) 舟が起点に至った後、蔓を舟に引き上げていく。このとき蔓と網をつないだ線は、閉じた楕円形になっている(図1の3)。(4) 蔓が全て引き揚げられると、網だけでより小さな楕円形が作られる(図1の4)。(5) 海中の作業者が、網の囲む面積を小さくしていく(図1の5)。(6) こうして残った、半径2~3mの、網で小さく囲まれた部分に、魚は追い込まれる。ここに袋網を、海底をすくうようにして入れる。その袋網を舟に揚げる(図1の6)。網入れから網揚げまでの所要時間は約2時間である。



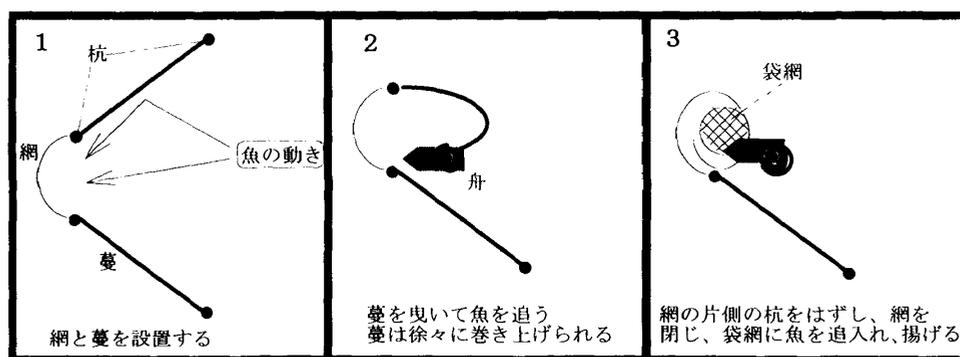
Appendix 図1 *angalakod* 漁の手順の概略図 (鳥瞰図)

[2] *amahang*

① *bahang* = 「蔓」 ② 蔓を使った追い込み漁 ③ 2~6人 ④ 1~2隻 ⑤ 大潮時 ⑥ 夜に網入れ、翌朝に網揚げ ⑦ サンゴ礁内の水路 (*sowang*) ⑧ アオヤガラ, クサビベラ, アオブダイ属, タマガシラ属, イカ等のサンゴ礁棲の魚 ⑨ 網 (長さ 100 f, 丈 1.5 m, 目合い 6 cm), 蔓 (1,000 f × 2 組)

概説: *angalakod* と同様に蔓で退潮時の魚の移動を止め、網に追い込む漁である。通常1日に一度しかおこなわれない点が *angalakod* と異なる。夜間に網と蔓を設置し、夜明け前に網を揚げるパターンが多い。この漁も頻繁にみられる。漁場の水深は1~3 m。(1) まず、水路に交差させて弧状に網を設置し、その片側あるいは両側に蔓をハの字型につなげておく。これを満潮時の少し前におこなう(図2の1)。(2) 干潮になった後、蔓を網のほうに向けて曳き、魚を網

に追い込むようにする。1人が舟に残って蔓を曳き、残りは海に入り蔓を上下させて魚を威嚇する(図2の2)。(3)ついで、蔓を舟の上に引き揚げる。その後、網が円形になるとこれを小さくし魚を囲んでいく。袋網か別の網で海底をすくうようにして入れ、囲まれた魚をその中に集める。それを舟に揚げる(図2の3)。同様の形態の漁が、小潮時におこなわれる場合には *anaggaq* (語幹は *sagga* = 「妨げる」あるいは「止める」)、大潮時のはじまりにおこなわれる場合には *analambat* (語幹は *salambat* = 大潮の始まりの時の潮汐の名称) と呼ばれることもある。



Appendix 図2 *amahang* 漁の手順の概略図 (鳥瞰図)

[3] *magpalduq*

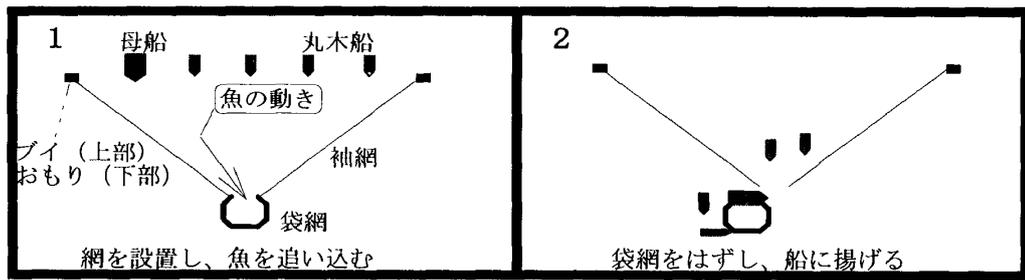
① *palduq* = 使われる網の名称 ② 袖網を使う追い込み漁 ③ 6~10人 ④ 4~6隻 (多くの場合 *tempel* は1隻のみ, 他は *boggoq*) ⑤ 特定されない ⑥ 日中 ⑦ 陸から遠くない礁池 (*halo*) ⑧ クロサギ属が主 ⑨ 袖網 (長さ1 km, 丈1.5~3 m, 目合いは1, 2 cm), 袋網 (蚊帳状の目合)

概説: 10年ぐらい前にビサヤ地方から伝えられたといわれる。一部のサマ人が採用している。月齢や潮汐には関係なく毎日, 昼間におこなわれる。通常1隻の母船 (エンジン付きの *tempel*) と数隻の丸木船 *boggoq* が1船団になる。袋網の最奥部とそこからV字型に両翼に広がる袖網が設置される。袖網の端の上部にはブイが, 下部にはサンゴ石などを用いた沈子がつく。その両翼の網の先端をつなぐ線の反対側から, 数隻の舟で, 海面を叩きながら魚を袋網のほうに追い込んでいく。そして袋網を漁船に揚げる。この作業を1日に数回おこなう。

[4] *magambit*

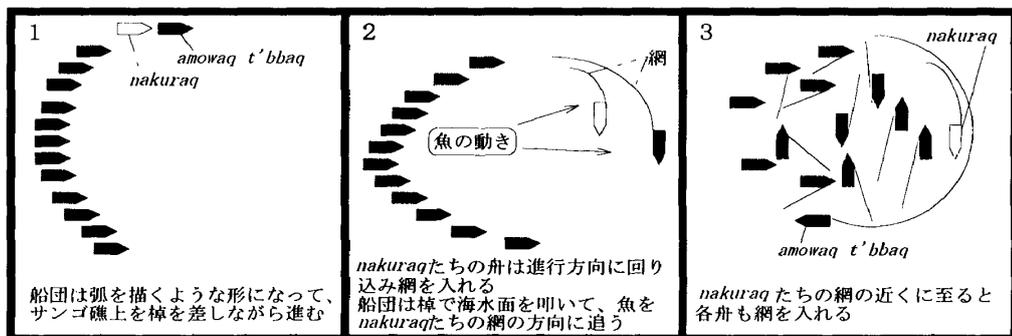
① *ambit* = 「手をつないで進む」 ② 棹を使った集団追い込み漁 ③ 30~150人 ④ 20~100隻 ⑤ 小潮時 ⑥ 日中 ⑦ サンゴ礁 (*t'bbā*) ⑧ サヨリ科, ダツ科 ⑨ 網 (*nakuraq* の網: 長さ100f, *nakuraq* の補助者の網300f, 他の参加者の網50f; いずれも丈は1~1.5 m, 目合いは4 cm)

概説: かつては頻繁におこなわれていたが, 現在ではまれにしかおこなわれない。*nakuraq*



Appendix 図3 magpaldug 漁の手順の概略図 (鳥瞰図)

(リーダー) を中心とする多数船団による追い込み漁。潮の流れが弱いいため魚群が視認しやすい、干満差が小さく潮にかかわらず日中通して作業できる、などの理由から小潮時におこなわれる。漁場の水深は1~5m。ただし網入れの場所は1~2mの浅瀬。(1) まず、漁の総指揮者である *nakuraq* の舟とその補助者の舟 (*amowaq t' bbaq* =「海面を叩く人々を率いる」) に率いられた船団は、弧を描くような形になって、サンゴ礁上を棹をさしながら進む。このとき各舟の互いの間隔は5~10mほどである(図4の1)。(2) 網入れの場が確認されると、まず木切れで舷側板を叩いて、ついで梶で海水面を叩いて魚を追いはじめる。各舟の間隔は狭まっていき、やがて3mぐらいになる。*nakuraq* たちは進行方向の先に回りこむ。*nakuraq* は櫂を立て合図をし、まず自分が網を入れる。そして補助者の舟もその後ろに円を描くようにして網を入れていく。船団はあっという間に激しく海面を叩き、*nakuraq* たちの網に魚を追い込む(図4の2)。(3) *nakuraq* たちの網のすぐ近くまで至ると、他の参加者も一斉に各自の網を縦横に入れる。網はいずれも刺し網。海に入って魚を追ったり、銚を使って獲物をしとめることもある(図4の3)。(4) *nakuraq* たちは先に網を揚げ再び移動しはじめる。しばらくして他の舟も網を揚げ追走する。そして同じ行程を繰り返す。1つの行程は30~40分ほど。1日に4~8回網入れする。これが3~7日続く。1日の作業の終わりには、*nakuraq* は自分と補助者の舟の漁獲のすべてを参加者に平等に分配する。



Appendix 図4 magambit 漁の手順の概略図 (鳥瞰図)

刺し網漁

[5] *analibut, angalinggiq*

①*salibut* = 「漁網」, *linggiq* = 「漁網」 (ともに漁網一般を意味するが, *linggiq* はより目合いの大きい網を指す) ②刺し網漁③*analibut* は通常2人, *angalinggiq* は2~4人④1隻⑤特定されない⑥日中,あるいは夕方に網入れ,翌朝に網揚げ⑦礁池 (*halo*), サンゴ礁内の水路 (*sowang*), 礁原 (*diyataq kud, b'ttong ambiyul*) ⑧サンゴ礁棲の魚多種,他に小型のサメ,アカエイ属,タイワンガザミ等⑨網 (長さ30~600f, 丈1~7.5m, 目合い4~8cm <*analibut*>, 8~20cm <*angalinggiq*>)

概説: もっとも頻繁におこなわれる網漁。刺し網漁である。網は一層で, サイズは様々である。操業人数は普通2人で, 夫婦でおこなうことが多い。大型の網を使う場合, 3, 4人が従事することもある。上部が海水面近くにくる軽い沈子を付けただけの浮き網を使う。この名称で呼ばれる漁法は大きく2つに分けられる。1つは, 網を設置してすぐに棹や銚などで海面を叩いて追い込むやり方で, より浅いサンゴ礁 (礁原や水路) でおこなわれることが多い。もう1つは, 夕方に網を入れ1晩網を張っておき, 翌朝揚げるやり方である。追い込みはせず, 満潮—干潮—満潮の潮汐変動に合わせて動く魚が, 網に掛かるのを待つ。この場合, 干満の潮差が大きく魚の移動が頻繁になるため, 大潮時により多く漁獲があるといわれる。通常は, 夕方の満潮時に網を入れ翌朝の次の満潮時に網を揚げる。水深3~6mほどの礁池か水路でおこなう。

[6] *magselo*

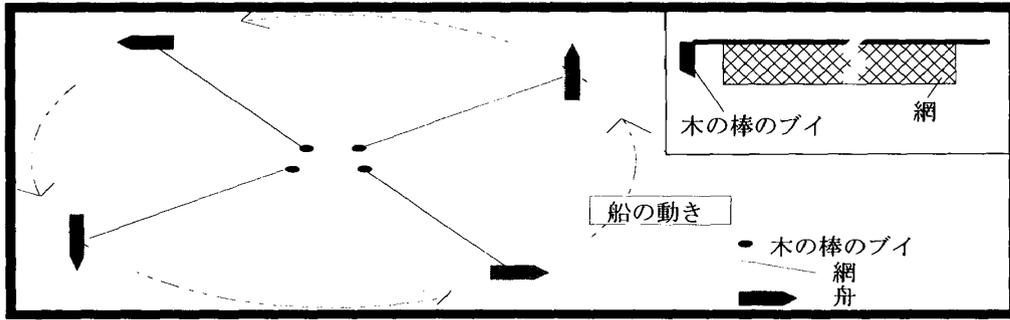
①*selo* = ダツ科の魚の総称②舟で刺し網を曳きまわして魚をからめ獲る網漁③通常2人④1隻⑤月齢20~10日まで⑥夜間⑦礁池 (*halo*) ⑧ダツ科が主⑨網 (長さ200f, 丈1m, 目合い4~6cm)

概説: 一部のサマ人が採用している漁。戦後になってビサヤ地方から伝えられたといわれる。沈子を付けない, あるいは軽い沈子のみついた浮き網を用いる曳き刺し網漁。月が明るいと魚が網に気づいてしまうので, 月明かりの弱い, あるいは月の出ていない時間の長い夜におこなわれる。まず, 舟から刺し網を流す。網の一方の先端には木の棒のブイが付けられている。網のもう一方を手で持ち, 舟がブイを中心にして円を描くよう操作する。こうして表層を泳ぐダツ科の魚を網に絡め獲る。夜通しでおこなわれ, 1晩に10回前後網を入れる。

一時的定置網漁

[7] *amungsud kaleyaq*

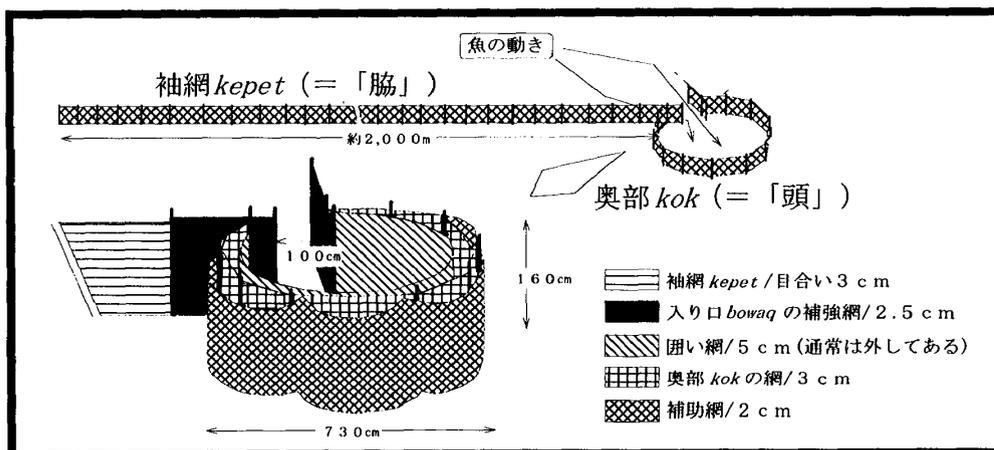
①*bungsud kaleyaq* = 「陸の方向を向いた定置網」②一時的定置網漁③7~15人④3~5隻⑤3



Appendix 図5 *magselo* 漁の舟と網の動きの概略図 (鳥瞰図)

～9月までの月齢7～10日⑥漁獲するのは満潮時⑦礁原 (*b'ttong ambiyul* と *diyataq kud*) ⑧アイゴ属が主⑨漁期の間だけ設置する定置網 (形態, サイズについては図6を参照)

概説: いくつかのグループは, この時期には必ずこれに従事する。V字型に設置された袖網で海を仕切り, 奥の直径8m前後の柵状の囲い網に魚を誘導して捕らえる定置網。3～4日間だけの一時的な定置網漁である。3～9月には, 対象魚であるアイゴ属の魚は産卵のため外洋 (*s'llang*) 側からサンゴ礁 (*t'ba*) の浅瀬に上がり, 月齢7～9, 10日の干潮時から満潮時にかけて外海側に戻る。その習性に着目した漁である。*kaleyaq* とは本文に記したように「陸向き」という意味で, この場合は袖網がV字型に *t'ba* の内部向きに開いていることを表わす。漁獲されるアイゴは産卵を終えたもの。複数の舟が1つの船団となって漁をおこなう (本文 III-4 参照)。初日の干潮時 (水深0.5～1m) に杭を一本一本海に入って建て, それに網を張る。その後満潮時 (水深2～2.5m) ごとに, 魚の入り具合を見てすくい網か手網で漁獲する。これが月齢9か10日まで数回おこなわれる。なお, *bungsud* には常設のものもあるが, シタンカイでこれを所有するサマはいない。



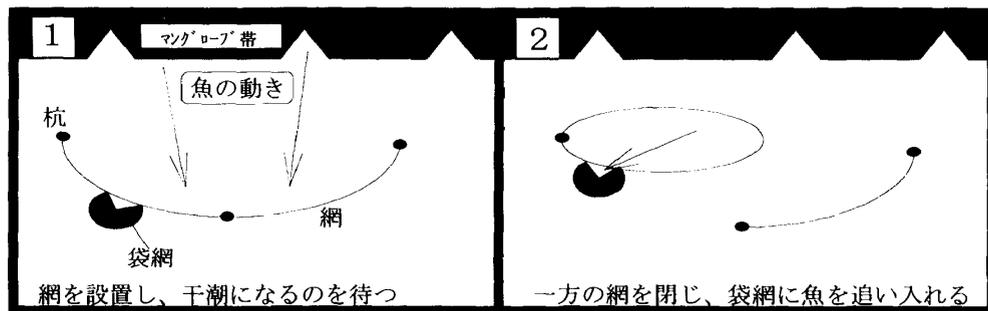
Appendix 図6 *bungsud kaleyaq* 網の形態の概略図 (立体図)

囲い網漁

[8] *anaplok*

①*taplok*＝「通路を閉じる」②クロサギ囲い網漁③5～8人④2～4隻⑤小潮時⑥夜間⑦マングローブのいくんだ島の沿岸 (*bihing deyaq*) でおこなわれる⑧クロサギ属およびメナダ属の幼魚⑨網 (長さ400 f, 丈1.5 m, 目合いは1～2 cm), 袋網 (蚊帳状の微小な目合)

概説：クロサギやメナダの幼魚が満潮時に泥質のマングローブの入り江で索餌し、潮が引きはじめると海の側に戻っていく習性に着目した漁法である。月のない夜で、潮が夜間に引きはじめるときにおこなわれるのが一般的である。小潮時の夜が望ましいとされる。まず、岸から5～10 mほど離れた水深1.5 mほどの海 (海底は砂泥質) に、弧を描くようにして網を設置する。網は、2つの網を繋いで1つにしている。この半楕円の弧状の網が、入り江から戻る魚をせき止める。網を設置するときは満潮時である (図7の1)。この作業の後の数時間、潮が引きはじめると待つ。潮が引いて浅くなったときに、繋いであった網の片方の網の両端を曳いて楕円を閉じる。こうしてできた円をさらに狭くしていき、魚を袋網に追い入れる (図7の2)。これらの作業では、操業者は海に入る。最後にこの袋網を舟に揚げる。規模が大きいときは1晩に1回のみであるが、小規模の網ではこれを数回繰り返す。



Appendix 図7 *anaplok* 漁の手順の概略図 (鳥瞰図)

[9] *amokot*

①*pokot*＝使われる網の名称②浅いサンゴ礁での囲い網③3～6人④1, 2隻 (*boggoq*) ⑤特定されない⑥日中⑦島の周囲の浅いサンゴ礁地 (*bihing deyaq*), 特にその窪地 (*powak*) の周辺⑧ニシン科の小魚⑨網 (長さ50～100 f, 丈1 m, 目合いは1～3 cm)

概説：特に技術、知識は要求されない。単純な漁。頻繁におこなわれるが、これを自分の主要な漁とする人は少ない。島の周囲の浅いサンゴが点在するところでおこなわれる。水深は1～1.5 mほど。袋網を使用する場合もある。潮汐や月齢の制約は特に受けない。通常は昼間におこなわれる。丸木舟 (*boggoq*) を曳いて操業者は海に入り、魚群を見つけるとそれを網で囲いこ

み、その囲んだ円を閉じていき、舟に揚げる。魚群は、半径数メートルのやや窪んだ地形 (*powak*) のところに集まることが多く、それを狙う。この作業が1日に可能な限りの回数おこなわれる。

釣り漁

[10] *am'ssi*

①*p'ssi* = 「釣り針」 ②手釣り漁 ③1人 ④1隻 (*boggoq* の場合もある) ⑤特定されない ⑥通常夕方から日の出前まで ⑦礁池 (*halo*)、サンゴ礁内の水路 (*sowang*)、礁縁 (*angan*) ⑧特定されない ⑨ナイロン製の釣り糸、釣り針 (長さ 1.5cm~5 cm, かえし付き)

概説：頻繁におこなわれる。礁池、水路、礁縁の水深 4~6 m の所の、サンゴ石やサンゴ群の周辺が漁場である。潮の流れが強いときのほうが魚の食いがよいため、大潮時が望ましいとされるが、潮に関係なく出漁者がみられる。餌には *pum-pum* と呼ばれるゴカイの一種を使う。これは、日が出ているうちに近隣の島の泥質の汀線帯で採捕する。夕方にイカを疑似餌で釣ってその切り身を餌に使うこともある。ほとんどの魚が対象となる。アジ科の大型種 (ロウニンアジ、オニヒラアジなど) やタマガシラ属、フエフキダイ属などが狙う対象としてよく言及される。

[11] *angullan*

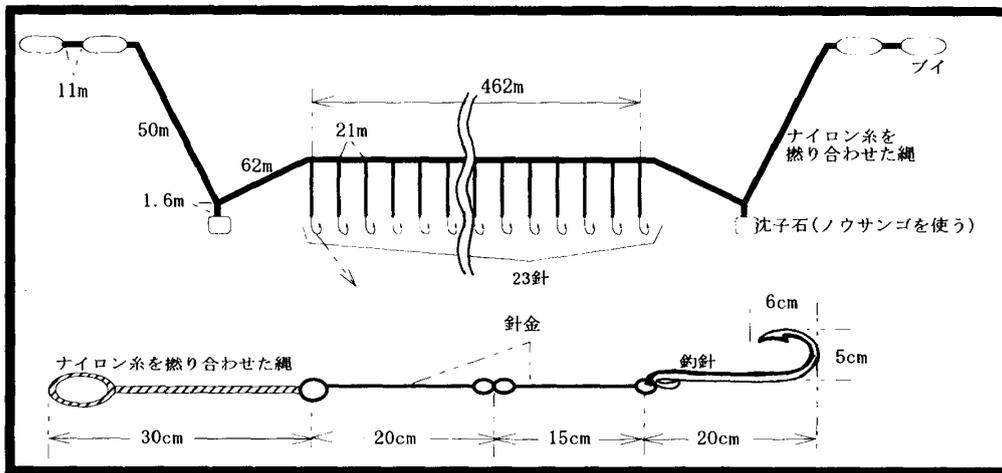
①*ullan* = 10 cm ほどのエビの名称 ②疑似餌を使った手釣り漁 ③1人 ④1隻 ⑤特定されない ⑥日中か満月前後の月の明るい夜 ⑦礁池 (*halo*)、サンゴ礁内の水路 (*sowang*) その他サンゴ礁内で 1 m 以上の水深のある場所 ⑧イカ各種 ⑨エビを模した疑似餌 (長さ 10~15 cm)

概説：[10] に記したように手釣り漁の餌に使うイカを、エビを模した疑似餌で釣る漁。あるいはイカそのものを対象としておこなう。イカは干してスルメにして売られる。暗くなるとイカは疑似餌を視認することができなくなるので、昼か夕方、あるいは月明かりのある夜におこなわれる。片手で舟を漕ぎ、トローリングのようにしてイカを釣る。

[12] *angalaway*

①*laway* = 「延縄漁具」 ②延縄漁 ③2~4人 ④1隻 ⑤特定されない ⑥夕方に漁具を設置、翌朝に揚げる ⑦礁縁 (*angan*)、水道あるいは外海 (*s'llang*) ⑧サメやエイの大型種、アジ科の大型種 (ロウニンアジ、オニヒラアジなど) ⑨延縄漁具 (図8を参照)

概説：比較的深い海での延縄漁。サメを対象とすることが多い。この場合フカヒレを得るのが目的。頻繁ではないが現在でも時々おこなわれる。礁縁や外海の水深 10~30 m の場所に延縄を設置する。季節や潮汐は特に関係しない。ハリセンボンやウツボなどの、身が白く匂いの強い魚の身が餌として用いられる。通常、夕方から夜の間設置し翌朝に揚げる。揚げるとき



Appendix 図8 laway (サメ延縄漁具) の一例

に1本刃の鋸 (*sangkil*) を使うこともある。エイやアジ科の魚を狙う延縄漁は、より小規模で、針は2~5cm針を使う。礁縁か、あるいはサンゴ礁内でもおこなわれる。この場合の延縄は、満潮近くの満ち潮時に入れられ、干潮時に揚げられる。餌には *waku-waku* と呼ばれる全長1mを越すゴカイの一種 (ちぎって使う)、ゴンズイ、クサビベラなどが使われる。

突き漁

[13] *anuq*

① *suq* = 「たいまつ」 ② 夜の突き漁 ③ 1~2人 ④ 1隻 ⑤ 特定されない ⑥ 夜 ⑦ サンゴ礁 (*t'bba*) ⑧ ナマコ多種、アカエイ科、小型のサメ、イカ、サヨリ科、ダツ科など ⑨ 鋸 (3~5mの竹の柄: *pogol* = 先端に長さ5~10cmの3又か4又の刃が固定されている, *sangkil* = 長さ15~30cmの着脱式の1本刃<縄に繋いである>が付けられている)

概説：月のない風の夜におこなわれる。海藻養殖集落近辺で頻繁におこなわれる。かつては先を割いた木や、落ちたココヤシの葉の束に火をつけたかがり火の明かりでこの漁をおこなっていたため、「たいまつ」が語幹になっている。今ではケロシンランプが普及している。夫婦が1隻の舟でおこなうことが多い。水深1~5mの礁原やサンゴ礁内の水道でおこなわれる。舳先に立ち、鋸を楫として使い舟を進める。同時に、舳の先端に吊してあるケロシンランプで海底を照らし、対象を見つけると鋸で魚を突く。通常は固定刃の鋸 (*pogol*) を使う。まれにアオウミガメ、大型のエイなどを突く。このときは1本刃の鋸 (*sangkil*) を使用する。

[14] *ahiyak pahi*

① *ahiyak* = 「突く」 *pahi* = 「大型のエイ」 ② 夜のエイ突き漁 ③ 2~3人 ④ 1隻 ⑤ 月齢13~17日

⑥夜、満潮時を過ぎてからの引き潮の時⑦サンゴ礁 (*t'baa*)⑧マダラトビエイ、ウシバナトビエイなどの大型のエイ (幅 1~1.5 m) ⑨銛 (*sangkil*)

概説：一部のサマがおこなう。月の明るい夜におこなわれる。満月前後の夜、満潮時を過ぎて引き潮になる頃に、エイは外海からサンゴ礁に上がり索餌する。それを狙う漁である。かなりの体力を要するため、ふつう男性どうしが組んでおこなう。エンジンをかけてゆっくりとサンゴ礁内を移動してまわり、ケロシンランプと月明かりに照らされた海面にエイを探す。エイを見つけるとエンジンを止め、ゆっくりとそれに近づき1本刃の銛で突く。海に飛び込んで突くこともある。エイに食込んだ刃は柄から離れる。その刃に繋がれた縄を手繰り寄せ、エイを引き揚げる。

その他

[15] *anuaq*

①*tuaq* = 漁に使う毒汁をだす蔓状の植物の名称②植物の毒を使った魚毒漁③2~3人④1隻⑤特定されない⑥日中、満潮時か干潮時⑦礁原 (*diyataq kud, b'ttong ambiyul*) ⑧特定されない (サンゴ礁棲の魚) ⑨ *tuaq* という植物、手網、固定刃の銛 (*pogol*)、あるいは網 (長さ 40~60 f, 丈 1~1.5 m, 目合い 4~6 cm)

概説：*tuaq* (または *tubaq*) と呼ばれる蔓性の植物 (Sather [1985: 202] はこの植物を学名 *Derris elliptica* の植物と同定している) の根の毒汁を利用する魚毒漁。凧のときの、満潮時、干潮時のいずれかの潮の流れが停滞しているとき (*tahik ahoggaq*) におこなわれる。通常礁原のサンゴ群のあるところ (水深 1~2 m) でおこなわれる。夫婦でおこなうことが多い。舟上で *tuaq* の束を叩いて汁をしみ出させ、潜ってサンゴ群のかげにその毒汁を拡散させる。これに麻痺した魚を手網ですくいとるか、銛で突きとる。サンゴの周りを網で囲い、魚が逃げられないようにする場合もある。これを潮が動きだすまで数回おこなう。サンゴに棲息する多種の魚が漁獲される。群を成すゴンズイを特に狙うこともある。サラサハタのように高価な種が獲れることもある。なおこの毒が魚を死に至らせることはまれで、数十分後には、魚は回復し容易に捕えることができなくなる。

謝 辞

本稿は1995年1月に京都大学人間・環境学研究科に提出した修士学位請求論文『フィリピン・サマの漁撈活動の実態と環境観——民俗環境論的視点から——』の一部を大幅に加筆改訂したものである。修士論文と本稿の作成にあたっては、国立民族学博物館の阿部健一氏、秋道智彌氏、フィリピン大学博士課程大学院生の赤嶺淳氏、京都大学の立本成文氏、田中耕司氏、上智大学の村井吉敬氏からご教示を頂いた。シタンカイにおいては Haji Musa Malabong 氏ほか多くサマ人の皆様のお世話になった。また、シタンカイにおける調査は財団法人大和銀行アジア・オセアニア財団の研究助成を得ておこなわれた。ここに記して謝意を表します。

参 考 文 献

- 秋道智彌. 1976. 「漁撈活動と魚の生態——ソロモン諸島マライタ島の事例」『季刊人類学』7(2):76-128.
 ————. 1988. 『海人の民族学——サンゴ礁を越えて』(NHK ブックス) 東京：日本放送出版協会.
 ————. 1995. 『海洋民族学——海のナチュラルリストたち』東京：東京大学出版会.
 Casino, Eric. 1976. *The Jama Mapun: A Changing Samal Society in the Southern Philippines*. Manila: Ateneo de Manila University Press.
 合田 濤. 1989. 『首狩りと言霊——フィリピン・ボントック族の社会構造と世界観』東京：弘文堂.
 羽原又吉. 1963. 『漂海民』(岩波新書) 東京：岩波書店.
 長谷川均. 1990. 「サンゴ礁の白い島——サンゴ洲島とその地形変化」『熱い自然——サンゴ礁の環境誌』サンゴ礁地域研究グループ(編), 118-136ページ所収. 東京：古今書院.
 堀 信行. 1990. 「世界のサンゴ礁からみた日本のサンゴ礁」『熱い自然——サンゴ礁の環境誌』サンゴ礁地域研究グループ(編), 3-22ページ所収. 東京：古今書院.
 河名俊男. 1990. 「離水サンゴ礁を特徴づけるノッチ」『熱い自然——サンゴ礁の環境誌』サンゴ礁地域研究グループ(編), 66-82ページ所収. 東京：古今書院.
 木庭元晴. 1990. 「琉球列島第四紀のサンゴ礁形成と島弧変動」『熱い自然——サンゴ礁の環境誌』サンゴ礁地域研究グループ(編), 155-175ページ所収. 東京：古今書院.
 Kunting, A. H. Y. C. 1989. *Sinama English Dictionary*. Zamboanga: Alliance Press.
 倉田 勇. 1977. 「慣習論断章」『社会人類学年報』Vol. 3: 25-48.
 Lapan, Adrian B.; and Nagatsu, Kazufumi. 1996. Research on Bajau Communities: Maritime People in Southeast Asia. *Asian Research Trends: A Humanities and Social Science Review* 6: 45-70.
 益田 一. 1984. 『フィールド図鑑 海水魚』東京：東海大学出版会.
 益田 一；荒賀忠一；吉野哲夫. 1980. 『南日本の沿岸魚』(改訂版) 東京：東海大学出版会.
 益田 一；アレン, G. R. 1987. 『世界の海水魚<太平洋・インド洋編>』東京：山と溪谷社.
 益田 一；林 公義；中村宏治；小林安雅(編). 1986. 『フィールド図鑑 海岸動物』東京：東海大学出版会.
 松井 健. 1989. 『琉球のニュー・エスノグラフィー』京都：人文書院.
 門田 修. 1986. 『漂海民——月とナマコと珊瑚礁』東京：河出書房新社.
 村井吉敬. 1994. 「東インドネシア諸島における伝統的資源保護慣行・サシについての覚え書き」『社会科学討究』117: 95-121.
 長津一史. 1995a. 「フィリピン・サマの漁撈活動の実態と環境観——民俗環境論的視点から」(修士学位論文) 京都大学人間・環境学研究科.
 ————. 1995b. 「海の民サマ人の生計戦略」『季刊民族学』74: 18-31.
 中井達郎. 1990. 「北限地域のサンゴ礁——サンゴ礁とは」『熱い自然——サンゴ礁の環境誌』サンゴ礁地域研究グループ(編), 57-65ページ所収. 東京：古今書院.
 中森 亨；井龍康文. 1990. 「サンゴ礁の地形区分と造礁生物の礁内分布」『熱い自然——サンゴ礁の環境誌』サンゴ礁地域研究グループ(編), 39-56ページ所収. 東京：古今書院.
 Nimmo, H. A. 1968. Reflections on Bajau History. *Philippine Studies* 16(1): 32-59.
 ————. 1972. *The Sea People of Sulu*. San Francisco: Chandler Publishing Company.
 ————. 1986. Recent Population Movements in the Sulu Archipelago: Implications to Sama Culture History. *Archipel* 32: 25-38.
 ————. 1990a. Religious Beliefs of the Tawi-Tawi Bajau. *Philippine Studies* 38(1): 3-27.
 ————. 1990b. The Boats of the Tawi-Tawi Bajau, Sulu Archipelago, Philippines. *Asian Perspectives* 29(1): 51-88.
 西村朝日太郎. 1974. 『海洋民族学——陸の文化から海の文化へ』(NHK ブックス) 東京：日本放送出版協会.
 野口武徳. 1988. 『漂海民の人類学』東京：弘文堂.
 奥谷喬司(編). 1994. 『サンゴ礁の生きもの』(山溪フィールドブックス9) 東京：山と溪谷社.
 大島襄二. 1992. 「世界のサンゴ礁地域の生態と文化」『熱い心の島——サンゴ礁の風土誌』サンゴ礁地域研究グループ(編), 3-15ページ所収. 東京：古今書院.
 Pallesen, A. Kemp. 1985. *Culture Contact and Language Convergence*. Manila: Linguistic Society of the Philippines.

- サンゴ礁地域研究グループ (編). 1990. 『熱い自然——サンゴ礁の環境誌』 東京: 古今書院.
- Sather, Clifford. 1968. Some Notes Concerning Bajau Laut Phonology and Grammar. *Sabah Society Journal* 3 (4): 205-224.
- _____. 1978. The Bajau Laut. In *Essays on Borneo Societies*. Hull Monographs on South-East Asia. No. 7, edited by King, V. T., pp. 172-192. London: Oxford University Press.
- _____. 1984. Sea and Shore People: Ethnicity and Ethnic Interaction in Southeastern Sabah. *Contributions to Southeast Asian Ethnography* 3: 3-27.
- _____. 1985. Boat Crew and Fishing Fleets: The Social Organization of Maritime Labour among the Bajau Laut of Southeastern Sabah. *Contributions to Southeast Asian Ethnography* 4: 165-214.
- _____. 1995. Sea Nomads and Rain Forest Hunter-Gatherers: Foraging Adaptations in the Indo-Malaysian Archipelago. In *The Austronesians: Historical and Comparative Perspectives*, edited by Bellwood, Peter; Fox, James J.; Tryon, Darrell, pp. 229-268. Canberra: Australian National University.
- 柴田紀夫. 1992. 「バジャウ語」『三省堂世界言語学辞典』(第三卷) 亀井 考; 河野六郎; 千野栄一 (編), 136-143ページ所収. 東京: 三省堂.
- 島袋伸三. 1992. 「サンゴ礁の民俗語彙」『熱い心の島——サンゴ礁の風土誌』サンゴ礁地域研究グループ (編), 48-62ページ所収. 東京: 古今書院.
- Smith, K. D. 1984. The Languages of Sabah: A Tentative Lexicostatistical Classification. In *Languages of Sabah: A Survey Report*. Pacific Linguistics Series No.78, edited by King, J. K.; and King, J. W., pp. 1-49. Canberra: The Australian National University.
- Sopher, D. E. 1977(1965). *The Sea Nomads: A Study of the Maritime Boat People of Southeast Asia*. Singapore: National Museum Singapore.
- 須藤健一. 1978. 「サンゴ礁海域における磯漁の実態調査中間報告(2)——石垣市登野城地区漁民社会の若干の分析」『国立民族学博物館研究報告』3(3): 535-556.
- 多辺田政弘. 1990. 『コモنزの経済学』東京: 学陽書房.
- 高橋達郎. 1990. 「サンゴ礁海岸の地形特性」『熱い自然——サンゴ礁の環境誌』サンゴ礁地域研究グループ (編), 25-38ページ所収. 東京: 古今書院.
- 武田 淳. 1990. 「伊計島の漁撈——変容と生態学的背景」『沖縄民俗研究』10(沖縄民俗学会): 17-36.
- 田中好國. 1990. 「石になった砂浜——ビーチロック」『熱い自然——サンゴ礁の環境誌』サンゴ礁地域研究グループ (編), 137-151ページ所収. 東京: 古今書院.
- 寺田勇文. 1996. 「スルー海域のサマ族——海洋民の『国民化』過程をめぐって」『国家のなかの民族——東南アジアのエスニシティ』綾部恒雄 (編), 217-252ページ所収. 東京: 明石書店.
- 渡久地健; 吉川博也. 1990. 「サンゴ礁地域の開発と保全——生活者の視点から地域形成を考える」『熱い自然——サンゴ礁の環境誌』サンゴ礁地域研究グループ (編), 300-316ページ所収. 東京: 古今書院.
- 鳥越皓之. 1989. 「環境と生活環境主義」『環境問題の社会理論——生活環境主義の立場から』鳥越皓之 (編), 13-53ページ所収. 東京: 御茶の水書房.
- Walton, Janice; and Walton, Charles. 1992. *English-Pangutaran Sama Dictionary*. Manila: Summer Institute of Linguistics.
- Warren, Carol. 1983. *Ideology, Identity, and Change: The Experience of the Bajau Laut of East Malaysia, 1969-1975*. Southeast Asian Monograph Series. No. 14. Queensland: James Cook University of North Queensland.
- Warren, James F. 1981. *The Sulu Zone 1768-1898: The Dynamics of External Trade, Slavery, and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State*. Singapore: Singapore University Press.
- 吉田集而. 1977. 「ハルマヘラ島における民俗方位の構造」『国立民族学博物館研究報告』2(3): 437-497.